

授業科目	医学総論（公衆衛生・精神保健含む）				
担当者	板倉登志子・山本永人・吉機俊雄・松井理直・木村晃大				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に必要な医学的知識について学ぶ。

■ 到達目標

言語聴覚士国家試験に必要な知識を身につける。

■ 授業計画

- 第1回 専門基礎分野 基礎医学（木村）
- 第2回 専門基礎分野 基礎医学（木村）
- 第3回 専門基礎分野 音響学（松井）
- 第4回 専門基礎分野 音響学（松井）
- 第5回 専門基礎分野 音声学（松井）
- 第6回 専門基礎分野 音声学（松井）
- 第7回 社会保障制度・関係法規（山本）
- 第8回 社会保障制度・関係法規（山本）
- 第9回 専門分野 失語・高次脳機能障害（板倉）
- 第10回 専門分野 失語・高次脳機能障害（板倉）
- 第11回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機）
- 第12回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機）
- 第13回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機）
- 第14回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機）
- 第15回 専門分野 失語・高次脳機能障害（吉機）

■ 評価方法

筆記試験100% 2年間の履修科目の総復習（国家試験と同形式の試験を2回実施、問題は五者択一形式）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

言語聴覚士過去問題を中心に分からないところを質問・確認し合って受験勉強を進めること。

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚士テキスト
 著者名：廣瀬肇 監修
 出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	解剖学				
担当者	柴田 雅朗				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

頭・頸部の解剖学的な構造を学び、言語聴覚領域の学習の礎とする。

■ 到達目標

中枢神経系、末梢神経系ならびに口腔、喉頭を構成している各部の名称や機能を説明できる。

■ 授業計画

- 第1回 神経系 I
1. 神経系の構成 2. 中枢神経系とは 3. 脊髄 4. 延髄と橋 5. 中脳
- 第2回 神経系 II
1. 間脳（視床と視床下部） 2. 大脳（大脳皮質、大脳基底核、大脳白質）
- 第3回 脳神経
1. 脳神経の概略 2. 脳神経（三叉神経、顔面神経、内耳神経、舌咽神経、迷走神経、舌下神経）
- 第4回 脳室系と脳の血管
1. 脳室 2. 髄膜（硬膜、クモ膜、軟膜） 3. 脳脊髄液 4. 脳の血管（内頸動脈とその枝、椎骨動脈とその枝、ウイリス動脈輪、硬膜静脈洞）
- 第5回 顔面と口腔の解剖
1. 口蓋 2. 口腔底 3. 舌と味蕾 4. 舌の発生 5. 咀嚼筋
6. 嚥下に働く筋
- 第6回 喉頭の解剖と
1. 舌骨と喉頭の軟骨 2. 声帯靭帯と声帯ヒダ 3. 声門 4. 喉頭の筋
5. 喉頭の神経
- 第7回 平衡・聴覚器の解剖
1. 外耳・中耳・内耳の構造 2. 聴覚と平衡覚の伝導路と反射路
- 第8回 三層性胚盤および鰓弓と総復習
1. 三層性胚盤 2. 鰓弓 3. 鰓弓由来の筋とその支配神経
総復習プリント配布

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業を受けた内容について、板書したノート、配布資料、教科書、ネッター解剖学アトラスを用いて、必ず復習を毎回行い、分からない内容がないようにして下さい。分からないことは自分で調べ考えてみて、解決がつかない場合は遠慮なく質問して下さい。

■ 教科書

書 名：配布資料で行います

■ 参考図書

書名：ネッター解剖学アトラス

著者名：相磯貞和 訳

出版社：南江堂

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

色鉛筆やマーカーなど色分けできる筆記用具を毎回、持ってきて下さい。色は4色あれば十分です。

授業科目	生理学				
担当者	宮井 和政				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

生理学は人体の機能を学ぶ学問である。生理学の内容はかなり範囲が広く深いのが、細胞の基本的な機能を概説したうえで、免疫系、循環器系、呼吸器系、消化器系、泌尿器系、内分泌系について各器官系ごとに基本的な考え方や重点事項を厳選して学習する。

■ 到達目標

- ・人体の各器官系の基本的な機能が理解できる。
- ・人体の構造を学ぶ解剖学や疾患を学ぶ臨床医学との関連が理解できる。
- ・人体の各器官系の協調した働きを俯瞰的に理解できる。

■ 授業計画

- 第1回 細胞と内部環境
- 第2回 血液と生体防御
- 第3回 心臓と循環
- 第4回 呼吸とガスの運搬
- 第5回 消化と吸収
- 第6回 尿の生成と排泄
- 第7回 酸塩基平衡
- 第8回 内分泌と代謝

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各授業の前に授業項目に該当する教科書の単元を予め通読（予習）しておくこと。また、授業後は各回に配布する小テストに解答できるように復習しておくこと。

■ 教科書

書 名：標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 生理学
 著者名：岡田隆夫・長岡正範
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：トートラ人体解剖生理学 原書10版
 著者名：佐伯由香・細谷安彦・高橋研一・桑木共之 編集、翻訳
 出版社：丸善出版

■ 留意事項

--

■ 講義受講にあたって

授業科目	病理学				
担当者	橋本 和明				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

疾病の基礎知識を会得する。

■ 到達目標

疾病の基礎知識を会得し、個々の病気の理解を行うことを可能とする。

■ 授業計画

- 第1回 病因論・退行性病変
- 第2回 代謝異常・進行性病変
- 第3回 循環障害
- 第4回 免疫
- 第5回 炎症・感染症
- 第6回 腫瘍
- 第7回 放射線障害・老化
- 第8回 先天異常・奇形

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適時授業中に指示をする。

■ 教科書

書 名：標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 病理学第3版
 著者名：梶原博毅・横井豊治
 出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	内科学（老年医学含む）				
担当者	宮井 潔				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

まず健常人の解剖・生理・生化学の基礎知識を簡単に復習してそれを把握した上で、内科学の総論・各論の全領域にわたる基礎的な重要項目について臨床現場での経験も交えて講義する。

■ 到達目標

内科学は臨床医学の基礎であるが、その範囲は余りにも広く、内容も深いため短期間でそのすべてをマスターするのは大変むずかしい。そこで基礎的な内科学の考え方、必要最小限の知識、専門用語などを理解するよう努める。

■ 授業計画

- 第1回 内科学総論－病因論（遺伝・感染・腫瘍・代謝異常等）
- 第2回 内科学総論－診断学（検査医学）、治療学、予防医学
- 第3回 内科学総論－血液疾患
- 第4回 内科学総論－膠原病・アレルギー・免疫疾患（1）
- 第5回 内科学総論－膠原病・アレルギー・免疫疾患（2）
小テスト及び解説
- 第6回 内科学総論－感染症
- 第7回 内科学総論－内分泌疾患
- 第8回 内科学総論－代謝疾患
- 第9回 内科学総論－循環器疾患
- 第10回 内科学総論－呼吸器疾患
- 第11回 内科学総論－胃・泌尿器疾患
- 第12回 内科学総論－消化器疾患
- 第13回 内科学総論－肝・胆・膵疾患
- 第14回 内科学総論－中毒・環境要因による疾患
- 第15回 老年医学

■ 評価方法

筆記試験95%、小テスト5%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業の始めに見本をお見せしますが、セミリーフを用い、各教科で習ったキーワードの“マイキーワードノート”を作製することをおすすめします。

■ 教科書

書 名：標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 内科学
 著者名：前田 眞治・上月 正博・飯山 準一
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書名：標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 老年学
著者名：大内尉義
出版社：医学書院

■ 留意事項

小テストを含む試験時に不正な行為があったと認められた者については、規定に定める第16条を適用し、当期科目の全ての試験を無効にする。

■ 講義受講にあたって

授業科目	小児科学				
担当者	田平 公子				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

小児の成長と発達、小児の形態的・生理的特徴、小児疾患の病態の特徴及び対応、よくみられる疾患・見逃せない疾患、小児の病気及び予防接種・母子保健・小児保健等について学ぶ。

■ 到達目標

小児の成長発達、小児の生理的特徴及び疾患の病態をよく理解する。
小児保健を把握する。

■ 授業計画

- 第1回 小児の発育発達 形態的・機能的特徴
- 第2回 小児の発育発達 生理的・社会的特徴
- 第3回 小児の栄養と生活
- 第4回 出生前小児科学
- 第5回 新生児 周産期学
- 第6回 小児保健・母子保健
- 第7回 予防接種 予防医学
- 第8回 小児の感染症
- 第9回 中枢性の疾患 脳性まひ、てんかん
- 第10回 中枢性疾患及び筋肉疾患
- 第11回 呼吸器・循環器疾患
- 第12回 消化器・血液疾患
- 第13回 アレルギー、免疫疾患
- 第14回 内分泌、泌尿器疾患
- 第15回 心身症、発達障害、小児の事故

■ 評価方法

筆記試験80% 及び小テスト2回20%で評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

教科書を必ず熟読すること。

■ 教科書

書 名：最新育児小児病学
著者名：黒田恭弘
出版社：南江堂

書 名：小児・思春期診療 最新マニュアル
著者名：五十嵐 隆
出版社：日本医師会

■ 参考図書

--

■ 留意事項

小テストを含む試験時に不正な行為があったと認められた者については、規定に定める第16条を適用し、当期科目の全ての試験を無効にする。

■ 講義受講にあたって

--

授業科目	精神医学				
担当者	高井田 輪香子				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

精神疾患の症状、診断、治療について学ぶ

■ 到達目標

精神医学に関心を持ち、基本的な知識を身につける

■ 授業計画

- 第1回 精神医学総論 精神科医療の歴史と現状
- 第2回 精神医学各論 神経症・心身症
- 第3回 精神医学各論 統合失調症・気分障害
- 第4回 精神医学各論 外因性・器質性・症状性の精神障害
- 第5回 精神医学各論 物質依存症
- 第6回 精神医学各論 老年期・児童青年期の精神障害
- 第7回 精神医学各論 パーソナリティ障害・睡眠障害
- 第8回 精神科の治療法

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習には教科書を用いてください。
復習には配布するプリントも用いてください。

■ 教 科 書

書 名：改訂第2版 専門医がやさしく語る はじめての精神医学
著者名：渡辺 雅幸
出版社：中山書店

■ 参考図書

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	リハビリテーション医学				
担当者	澤井里香子・今井公一・柳千磨・辻郁・他				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・言語聴覚療法に必要なリハ医学の基礎知識及び臨床場面で重要となる事柄を、心理的問題も含めて講義する。(澤井)
- ・理学療法の歴史や定義、理学療法過程、理論的な背景などについて学ぶ。(今井・柳)
- ・講義形式で、作業療法の歴史や理論的背景、種々の展開例から作業療法実践の枠組みと実際を学ぶ。(辻ほか)

■ 到達目標

- 1) 言語聴覚療法に必要な医学的基礎知識及び代表的な疾患について、患者個人の全体像を把みアプローチするために必要な臨床上の考え方を身につける。(澤井)
- 1) 理学療法の治療体系について説明できる。(今井・柳)
- 2) 理学療法の対象について説明できる。(今井・柳)
- 3) リスク管理など理学療法の実際について説明できる。(今井・柳)
- 1) 作業療法の枠組みを概観できる。(辻ほか)
- 2) 作業療法の実践例を知ること、その専門性を理解できる。(辻ほか)

■ 授業計画

- 第1回 理学療法の歴史と定義・対象 (今井)
- 第2回 理学療法の過程と治療体系 (今井)
- 第3回 理学療法の実際 (柳)
- 第4回 理学療法の実際 (柳)
- 第5回 作業療法概論 (辻・他)
- 第6回 身体障害領域における作業療法の実際 (辻・他)
- 第7回 精神障害領域における作業療法の実際 (辻・他)
- 第8回 発達障害領域における作業療法の実際 (辻・他)
- 第9回 リハビリテーション医学の概念と障害学 (澤井)
- 第10回 廃用症候群・過用 / 誤用症候群
中枢性神経麻痺の回復 (澤井)
- 第11回 脳卒中のリハビリ 運動学習 (澤井)
- 第12回 目標設定レベルの階層性 留守居能力
ケアマネジメント パーキンソン病のリハビリ (澤井)
- 第13回 神経疾患のリハビリ (ALS,SCD) ターミナルケア 呼吸リハ (澤井)
- 第14回 心理的問題について (障害受容、チームワークなど) (澤井)
- 第15回 授業全体の総合的演習 (澤井)

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

講義前にプリントを配布する。講義までに必ず読んでおくこと。(澤井)
講義終了後は復習し、分からないことがあれば次回の講義時に質問すること。

■ 教科書

■ 参考図書

書名：図説 パーキンソン病の理解とリハビリテーション

著者名：山永 裕明、野尻 晋一

出版社：三輪書店

書名：：動画で学ぶ脳卒中のリハビリテーション

著者名：園田 茂

出版社：医学書院

書名：臨床リハ

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	耳鼻咽喉科学				
担当者	藤木暢也・岡野高之・山本秀文・阪本浩一				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

耳鼻咽喉科疾患の病態と治療について講義を行う

■ 到達目標

耳鼻咽喉科疾患について、言語聴覚士に必要な知識を身に着けることを目標とする

■ 授業計画

- 第1回 総論／鼻・咽喉頭・頸部の機能解剖 (1) (藤木)
- 第2回 鼻・咽喉頭・頸部の機能解剖 (2) (藤木)
- 第3回 鼻・咽喉頭・頸部の機能解剖 (3) (藤木)
- 第4回 鼻・咽喉頭・頸部の機能解剖 (4) (藤木)
- 第5回 側頭骨の解剖と生理 (外耳・中耳) (岡野)
- 第6回 聴覚伝導路 (内耳・中枢) (岡野)
- 第7回 外耳・中耳の疾患とその治療 (1) (岡野)
- 第8回 外耳・中耳の疾患とその治療 (2) (岡野)
- 第9回 内耳の解剖 (山本)
- 第10回 平衡機能検査 (山本)
- 第11回 めまい疾患 各論1 (山本)
- 第12回 めまい疾患 各論2 (山本)
- 第13回 遺伝性難聴その分類と診断 (阪本)
- 第14回 乳幼児の難聴：滲出中耳炎からウイルス性難聴まで (阪本)
- 第15回 新生児スクリーニング後の耳鼻咽喉科医の関わり：精密検査からその後の経過観察まで (阪本)

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

毎授業後には、各自にて復習し、理解を深めておくこと

■ 教 科 書

書 名：Success 耳鼻咽喉科 第2版
 著者名：洲崎春海 鈴木衛 吉原俊雄
 出版社：金原出版

■ 参考図書

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	臨床神経学				
担当者	小倉 光博				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

スライドを中心に、臨床的に頻度の高い神経疾患を分かりやすく説明する。あわせて、神経解剖、神経性生理、神経症候学、神経放射線診断についても解説する。

■ 到達目標

神経解剖、神経生理などの基本的知識をもとに、臨床でよく経験する神経疾患の病態、診断、治療を理解すること。

■ 授業計画

- 第1回 神経解剖・神経生理
- 第2回 神経解剖・神経生理
- 第3回 脳血管障害
- 第4回 脳血管障害
- 第5回 脳腫瘍
- 第6回 脳腫瘍
- 第7回 頭部外傷
- 第8回 頭部外傷
- 第9回 小児頭部外傷・先天奇形
- 第10回 神経血管症候群
- 第11回 パーキンソン病
- 第12回 認知症
- 第13回 頭痛
- 第14回 神経変性疾患・感染症
- 第15回 神経画像診断

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業復習をし、分からないところは次回の授業で積極的に質問すること。

■ 教科書

■ 参考図書

書 名：絵で見る脳と神経
 著者名：馬場元毅
 出版社：医学書院

■ 留意事項

--

■ 講義受講にあたって

--

授業科目	形成外科学				
担当者	古郷 幹彦				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に必要な顎顔面形成外科学について学ぶ

■ 到達目標

基礎と臨床の知識の習得と理解する。

■ 授業計画

- 第1回 総論
- 第2回 口唇裂・口蓋裂
- 第3回 口腔腫瘍
- 第4回 顎変形症
- 第5回 顎顔面の再建
- 第6回 唾液腺の機能と唾液腺疾患
- 第7回 試験対策
- 第8回 試験対策

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

適宜講義中に指示をする。

■ 教科書

書 名：のどちんこの話
 著者名：古郷幹彦
 出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	臨床歯科医学				
担当者	山西 整				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に必要な歯科的知識について学ぶ。

■ 到達目標

歯科的知識の習得と理解

■ 授業計画

- 第1回 歯科概論
歯と歯周組織について（発生、構造と機能）
- 第2回 歯と歯周組織について 1
疾患と治療（う蝕、歯髄炎、歯周病、歯列不正、歯の欠損）
- 第3回 歯と歯周組織について 2
疾患と治療（う蝕、歯髄炎、歯周炎、歯列不正、歯の欠損）
- 第4回 口腔、顎、顔面について
発生、構造と機能（摂食、咀嚼、嚥下、構音）
- 第5回 顎関節、唾液腺について
発生、構造と機能（摂食、咀嚼、嚥下、構音）
- 第6回 口腔ケアについて
歯科医学的処置（補綴、保存、歯科矯正など）について
- 第7回 口蓋裂治療と ST
- 第8回 口蓋裂治療と ST

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習を行い、疑問点は次回の講義で質問をすること

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学
著者名：道健一
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	口腔外科学				
担当者	本橋 具和				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

口腔・顎・顔面の構造と機能および口腔・顎・顔面領域の疾患について講義をおこなう。

■ 到達目標

言語聴覚士として必要な口腔・顎・顔面の構造および口腔・顎・顔面領域の疾患について理解する。

■ 授業計画

- 第1回 口腔・顎・顔面領域の先天異常、変形
- 第2回 顎・口腔領域の炎症性疾患、口腔粘膜疾患
- 第3回 顎・口腔領域の嚢胞性疾患
- 第4回 顎・口腔領域の損傷・外傷、顎関節疾患
- 第5回 顎・口腔領域の神経疾患、唾液腺疾患
- 第6回 顎・口腔領域の腫瘍および腫瘍類似疾患
- 第7回 口腔、顎、顔面領域の手術と機能回復
- 第8回 試験と解説

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

シラバスを参考に授業範囲を予習してください。

■ 教科書

■ 参考図書

書 名：言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学 器質性構音障害
 著者名：道 健一 今井智子 高橋浩二 山下夕香里
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	呼吸発声系医学（呼吸発声発語系の構造、機能、病態）				
担当者	本多知行・楯谷一郎				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

嚥下障害分野：嚥下障害の臨床に必要な医学的知識および支援のあり方について学ぶ。（本多）
音声障害分野：音声障害の基礎及び臨床について、医学的な観点から講義を行う。（楯谷）

■ 到達目標

嚥下障害分野：嚥下障害の理解を深め、人間の根源的欲求である「口から食べる」という QOL の向上を目的として、言語聴覚士が支援できる技術と考え方を習得する。（本多）
音声障害分野：音声障害のリハビリテーションを行う際に必要となる耳鼻咽喉科学的知識を習得する。（楯谷）

■ 授業計画

- 第1回 嚥下障害の理解のために必要な解剖・生理（本多）
- 第2回 嚥下障害の理解のために必要な評価と訓練1（本多）
- 第3回 嚥下障害の理解のために必要な評価と訓練2（本多）
- 第4回 嚥下障害におけるチームアプローチと関連事項（本多）
- 第5回 偽（仮）性球麻痺タイプの嚥下障害の特徴とアプローチ（本多）
球麻痺タイプの嚥下障害の特徴とアプローチ
- 第6回 変性疾患の嚥下障害に対する特徴とアプローチ（本多）
- 第7回 嚥下障害の重症度分類と最近の話題（本多）
- 第8回 喉頭の解剖（楯谷）
- 第9回 発声の生理機構（楯谷）
- 第10回 喉頭検査法（楯谷）
- 第11回 喉頭疾患の診断と治療：器質的病変（楯谷）
- 第12回 喉頭疾患の診断と治療：器質的病変（楯谷）
- 第13回 喉頭疾患の診断と治療：非器質的病変（楯谷）
- 第14回 音響分析・音声検査法（楯谷）
- 第15回 まとめ（楯谷）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

受講後は、その都度レジメやノート搭を読み返し、必ず復習をしておくこと。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための音声障害学
著者名：大森孝一
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書名：「摂食・嚥下リハビリテーション」第2版

著者名：金子芳洋

千野直一監修

出版社：医歯薬出版

書名：「嚥下障害の臨床」第2版

著者名：日本嚥下障害臨床研究会監修

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	聴覚系医学（聴覚系の構造、機能、病態）				
担当者	金丸 真一				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

聴覚系の構造・機能・病態と疾患について解説する。

■ 到達目標

聴覚系の構造や機能を理解し、その疾患について言語聴覚士に必要な知識を身につける。

■ 授業計画

- 第1回 耳科学の概説と聴覚系の構造①（外耳・中耳・内耳）
- 第2回 聴覚系の機能①（外耳・中耳）
- 第3回 聴覚系の機能②（内耳）
- 第4回 聴覚系の機能③（聴神経と視聴中枢経路）
- 第5回 聴覚系の機能④（聴覚中枢機構、両耳聴能と方向感覚）
- 第6回 聴覚検査と耳疾患
- 第7回 聴覚器官の病態①（外耳・中耳疾患①）
- 第8回 聴覚器官の病態②（外耳・中耳疾患②）
- 第9回 鼓室形成手術
- 第10回 聴覚器官の病態③（内耳疾患①）
- 第11回 聴覚器官の病態④（内耳疾患②）
- 第12回 内耳再生医学
- 第13回 聴覚器官の病態⑤（後迷路・中枢性難聴疾患）
- 第14回 聴覚と音声・言語・音楽
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習を行い、分からないことは随時授業内で質問すること。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための聴覚障害学
 著者名：喜多村健 編著
 出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	神経系医学（神経系の構造、機能、病態）				
担当者	宮井 和政				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

神経系は、感覚の受容、情報の処理、効果器への指令を行う器官系であり、環境の変化に応じた反応を引き起こすために欠かせない情報伝達を担う。神経系は機能が部位ごとに異なり（機能局在）、その部位ごとが決まった経路で連絡している（伝導路）ので、神経系の働きと病態を理解するためには、主な機能局在と伝導路を把握する必要がある。この授業では、機能局在と伝導路に主眼を置いて、中枢神経系と末梢神経系の基本的な構造と機能について病態とも関連させて学習する。

■ 到達目標

- ・ 神経細胞の形態と情報伝達のしくみを理解できる。
- ・ 脳と脊髄の構造と機能、および主要な伝導路を理解できる。
- ・ 脳神経、脊髄神経、自律神経系の構造と機能を理解できる。
- ・ 中枢および末梢神経系の病態と検査の概要を理解できる。

■ 授業計画

- 第1回 神経組織・神経伝導のしくみ
- 第2回 神経系の分類と概要
- 第3回 中枢神経系の構造と機能（脊髄）
- 第4回 中枢神経系の構造と機能（脳幹・間脳）
- 第5回 中枢神経系の構造と機能（大脳基底核・小脳）
- 第6回 中枢神経系の構造と機能（大脳辺縁系）
- 第7回 中枢神経系の構造と機能（大脳皮質）
- 第8回 中枢神経系の構造と機能（伝導路）
- 第9回 中枢神経系の構造と機能（脳血管系・脳脊髄液）
- 第10回 末梢神経系の構造と機能（脊髄神経）
- 第11回 末梢神経系の構造と機能（脳神経）
- 第12回 末梢神経系の構造と機能（自律神経）
- 第13回 中枢神経系の病態
- 第14回 末梢神経系の病態
- 第15回 神経検査・画像検査

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

各授業の前に授業項目に該当する教科書の単元を予め通読（予習）しておくこと。また、授業後は各回に配布する小テストに解答できるように復習しておくこと。

■ 教科書

書名：絵でみる脳と神経 しくみと障害のメカニズム（第4版）

著者名：馬場元毅

出版社：医学書院

■ 参考図書

書名：ブルーメンフェルト カラー神経解剖学 - 臨床例と画像鑑別診断 -

著者名：ハル・ブルーメンフェルト（安原治 訳）

出版社：西村書店

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	臨床心理学Ⅰ（理論と分類）				
担当者	藤井 章乃				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

臨床心理学についての人格理論、発達理論、心理アセスメント、心理療法を学び、その内容に基づいた実習や感受性トレーニングを行うことで自己理解、他者理解を深め、対人援助について具体的に考察する。

■ 到達目標

自己理解、他者理解を通して人間理解を深め、理想的な人間関係について考え、対人援助が実践できるようになっていくことを目標とする。

■ 授業計画

- 第1回 臨床心理学概論
- 第2回 感受性トレーニング
- 第3回 人格理論 フロイトⅠ
- 第4回 人格理論 フロイトⅡ
- 第5回 人格理論 ユングⅠ
- 第6回 人格理論 ユングⅡ
- 第7回 人格理論 ロジャーズ
- 第8回 発達理論 マーラー・ウィニコット エリクソン
- 第9回 実習 生涯発達について
- 第10回 人格理論 フロイト以降
- 第11回 実習 精神医学
- 第12回 精神医学について
- 第13回 パーソナリティ理論
- 第14回 心理アセスメント
- 第15回 人格検査 質問紙法 実習

■ 評価方法

毎授業後に、授業の振り返りとして感想を提出する（20％） 実習後には、実習の振り返りをレポートにして提出する場合がある（20％） 筆記試験（60％）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

実習後には、実習の振り返りをレポートにして提出する場合がある。

■ 教科書

書 名：心とかかわる臨床心理
 著者名：川瀬正裕 松本真理子 松本英夫
 出版社：ナカニシヤ出版

■ 参考図書

--

■ 留意事項

--

■ 講義受講にあたって

--

授業科目	臨床心理学Ⅱ（査定と心理療法）				
担当者	藤井 章乃				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

臨床心理学についての人格理論、発達理論、心理アセスメント、心理療法を学び、その内容に基づいた実習や感受性トレーニングを行うことで自己理解、他者理解を深め、対人援助について具体的に考察する。

■ 到達目標

自己理解、他者理解を通して人間理解を深め、理想的な人間関係について考え、対人援助が実践できるようになっていくことを目標とする。

■ 授業計画

- 第1回 人格検査 投影法
- 第2回 人格検査 投影法 実習
- 第3回 心理アセスメント まとめ
- 第4回 心理療法の基本的態度－クライエント中心療法
- 第5回 傾聴訓練Ⅰ
- 第6回 傾聴訓練Ⅱ
- 第7回 精神分析療法
- 第8回 分析的心理療法
- 第9回 遊戯療法
- 第10回 芸術療法
- 第11回 芸術療法 実習
- 第12回 森田療法 家族療法
- 第13回 行動療法
- 第14回 認知行動療法 自律訓練法
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

毎授業後に、授業の振り返りとして感想を提出する（20％） 実習後には、実習の振り返りをレポートにして提出する場合がある（20％） 筆記試験（60％）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

実習後には、実習の振り返りをレポートにして提出する場合がある。

■ 教科書

書 名：心とかかわる臨床心理
 著者名：川瀬正裕 松本真理子 松本英夫
 出版社：ナカニシヤ出版

■ 参考図書

--

■ 留意事項

--

■ 講義受講にあたって

--

授業科目	生涯発達心理学 I (乳幼児期)				
担当者	岡崎 満希子				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

発達とは、誕生から死に至るまでの個体の一連の変化であり、それは環境との相互作用によって成される。本講義では、そのような発達観に基づいて、主に乳幼児期について学んでいく。発達心理学に関する諸理論のみならず、近年の発達科学研究の動向についても触れる。

■ 到達目標

乳幼児期の発達の流れを大まかに掴むことと、各領域でポイントになる項目の理解を目標とする。

■ 授業計画

- 第1回 発達とは
- 第2回 心理発達に関する諸理論
- 第3回 乳児期の発達 1 知覚の発達と乳児研究
- 第4回 乳児期の発達 2 愛着と関係性の発達
- 第5回 幼児期の発達 1 思考の発達と遊び
- 第6回 幼児期の発達 2 遊びと社会性の発達
- 第7回 自己制御機能と自我の発達
- 第8回 まとめ
- 第9回 発達理論 1 (フロイト)
- 第10回 発達理論 2 (ピアジェ)
- 第11回 発達理論 3 (エリクソン)
- 第12回 その他の発達理論
- 第13回 児童虐待について
- 第14回 近年の発達科学研究の動向
- 第15回 まとめ

■ 評価方法

筆記試験80%、小テスト20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

特に重要な点については、その都度指示をしますので、毎回ノートに整理し復習するようにして下さい。

■ 教科書

書 名：生涯発達心理学 認知・対人関係・自己から読み解く
 著者名：鈴木忠・飯牟礼悦子・滝口のぞみ
 出版社：有斐閣アルマ

■ 参考図書

書名：よくわかる発達心理学第2版
著者名：無藤隆、岡本裕子、大坪治彦編
出版社：ミネルバ書房

■ 留意事項

教科書に加え、各回に配布するハンドアウトをベースに講義をします。資料が多くなるため、ファイリングすることをお勧めします。小テストを含む試験時に不正な行為があったと認められた者については、規定に定める第16条を適用し、当期科目の全ての試験を無効にする。

■ 講義受講にあたって

発達心理学は、言語発達の基礎であるとともに、関連する臨床の礎となります。しっかりと取り組んで下さい。

授業科目	生涯発達心理学Ⅱ（幼児期～老年期）				
担当者	森田喜治・森定美也子・他				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・人間関係論から見た人間の発達（森田）
- ・老年期のエイジングとパーソナリティー、認知症の問題、死への対応について解説する。老年期のエイジングとパーソナリティーについて理解を深め、STが如何に対応すべきかを学んで頂きたい。(森定 他)

■ 到達目標

- ・生物学的発達の理解だけでなく、人間であるがゆえに重要となる人間関係の観点から発達を理解する。
- ・各発達段階の課題や病理について理解し、適切なアプローチについて考えることが出来る。

■ 授業計画

- 第1回 発達について、人間関係学、間主観性、精神分析からの理解（森田）
- 第2回 乳幼児期の人間関係の発達と機能の発達との関連（森田）
- 第3回 児童期、思春期の関係の発達と精神的成長との関連（森田）
- 第4回 児童期、思春期の問題形成とその心理療法（森田）
- 第5回 青年期、成人期の人間関係の発達（特に家族との関係）（森田）
- 第6回 青年期、成人期の人間関係上の問題とその心理療法（特に家族との関係）（森田）
- 第7回 成人期、中年期の人間関係の発達（特に夫婦の関と、子どもとの関係）（森田）
- 第8回 成人期、中年期の人間関係上の問題とその心理療法（老いの受け入れと、老いの意味）（森田）
- 第9回 老年期の位置づけとコミュニケーションの基本（森定）
- 第10回 老年期の課題とコミュニケーション方法 - 認知症の特徴と対応について-①（森定）
- 第11回 老年期の課題とコミュニケーション方法 - 認知症の特徴と対応について-②（森定）
- 第12回 老年期の方へコミュニケーション方法 - 老人保健施設での集団療法、回想法、コラージュ療法-③（森定）
- 第13回 老年期の方へコミュニケーション方法 - 老人保健施設での集団療法、回想法、コラージュ療法-④（森定）
- 第14回 死への対応1（講師非公表）
- 第15回 死への対応2（講師非公表）

■ 評価方法

レポート100%、(尚、レポートは心理学的観点からの自分史理解になりますので専門書の記述も必要です)

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

森田：特に何かを予習するということはないのですが、発達の観点がもしかすると他の先生方と異なるかもしれません。どちらかという、ワロンの考え方に近いかもしれません。つまり人間関係の中で形作られるものを主としてます。ですので、人間関係に関する哲学や、人間関係の在り方等に関係する文献を興味に合わせて読んでいただければと思います。

■ 教科書

--

■ 参考図書

■ 留意事項

毎年思うことですが、授業態度は、静かで、おとなしいのがいいというわけではない。教わること、学問に対する忠実さを求めるわけではない。むしろ、学問に対する貪欲さからの質問等があるとさらに良い。したがって、ディスカッションできるように心がけてもらいたい。

■ 講義受講にあたって

授業科目	学習・認知心理学 I (感覚・知覚・学習・記憶)				
担当者	武藤 拓之				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に必要とされる学習・認知心理学の諸分野について解説する。前期は「感覚」「知覚・認知」「学習」「記憶」「対人認知」に関する内容を扱う。特に、本講義では心理学と日常生活との関連性を示す身近な例を数多く紹介する。また、講義内容の理解を促すために、図や写真、動画などの視聴覚教材を多用し、教室内での実験やデモンストレーション、グループワークなどのアクティブ・ラーニングも適宜実施する。

■ 到達目標

以下の5つの問いに対して、心理学の用語と具体例を用いて分かりやすく説明できる。

1. 生体はどのようにして外の世界や自己についての情報を受け取るか？ (感覚)
2. 入力された感覚情報から、どのようにして主観的な世界が構成されるのか？ (知覚・認知)
3. 生体はどのようにして新しい知識や行動を獲得するか？ (学習)
4. 記憶はどのように形成され、保持され、思い出されるのか？ (記憶)
5. 他者に対する印象はどのような要因によって規定されるか？ (対人認知)

■ 授業計画

- 第1回 科学としての心理学／心理学の歴史
- 第2回 感覚 (1)：感覚の種類と成立過程／心理量と物理量の対応
- 第3回 感覚 (2)：網膜と視知覚／色彩の知覚
- 第4回 知覚・認知 (1)：形の知覚／奥行きの知覚／運動の知覚
- 第5回 知覚・認知 (2)：知覚の適応性 (錯視と恒常性)／知覚の可塑性
- 第6回 知覚・認知 (3)：オブジェクト認知／注意／感覚間の相互作用
- 第7回 学習 (1)：古典的条件づけ／オペラント条件づけ
- 第8回 学習 (2)：さまざまな学習 (条件づけの展開／技能学習／社会的学習)
- 第9回 学習 (3)：動機づけ
- 第10回 記憶 (1)：記憶の過程と分類
- 第11回 記憶 (2)：短期記憶とワーキングメモリ／記憶の神経基盤
- 第12回 記憶 (3)：記憶術／長期記憶
- 第13回 記憶 (4)：忘却
- 第14回 対人認知：印象形成／対人魅力／認知的不協和
- 第15回 前期のまとめ／確認テスト

■ 評価方法

筆記試験：70%
毎回の小レポート：30%

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

講義内で配布した資料を次回までに改めて読み通して復習しておくこと。参考図書の該当部分も併せて読むことを推奨。

■ 教科書

■ 参考図書

書名：心理学（第5版）

著者名：鹿取 廣人, 杉本 敏夫, 鳥居 修晃

出版社：東京大学出版会

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

受講生の要望や関心に合わせて講義内容を多少変更することがあります。本講義の内容に関する質問、批判、意見などは歓迎します。小レポートの自由記述欄やメール等で伝えて頂いてもかまいません。

授業科目	学習・認知心理学Ⅱ（思考・言語）				
担当者	武藤 拓之				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士に必要とされる学習・認知心理学の諸分野について解説する。後期は「思考・知識」「言語」に関する内容を扱う。特に、本講義では心理学と日常生活との関連性を示す身近な例を数多く紹介する。また、講義内容の理解を促すために、図や写真、動画などの視聴覚教材を多用し、教室内での実験やデモンストレーション、グループワークなどのアクティブ・ラーニングも適宜実施する。

■ 到達目標

以下の4つの問いに対して、心理学の用語と具体例を用いて分かりやすく説明できる。

1. 人の知識や概念はどのような構造を持つか？（知識）
2. ヒトの思考にはどのような特徴があるか？（思考）
3. 言語にはどのような性質があり、どのように理解・産出されるのか？（言語）
4. ヒトは言語をどのように使用するか？（言語）

■ 授業計画

- 第1回 前期の復習と後期のオリエンテーション
- 第2回 思考・知識（1）：知識の構造／概念
- 第3回 思考・知識（2）：問題解決と思考／推論
- 第4回 思考・知識（3）：ヒューリスティクスと認知バイアス／心的イメージ
- 第5回 言語（1）：言語の特徴／非言語的コミュニケーション
- 第6回 言語（2）：言語の理解と産出
- 第7回 言語（3）：言語と思考／語用論
- 第8回 学習・認知心理学Ⅰ・Ⅱのまとめ

■ 評価方法

筆記試験：68%
毎回の小レポート：32%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

講義内で配布した資料を次回までに改めて読み通して復習しておくこと。参考図書の該当部分も併せて読むことを推奨。

■ 教科書

■ 参考図書

書 名：心理学（第5版）
著者名：鹿取 廣人，杉本 敏夫，鳥居 修晃
出版社：東京大学出版会

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

受講生の要望や関心に合わせて講義内容を多少変更することがあります。本講義の内容に関する質問、批判、意見などは歓迎します。小レポートの自由記述欄やメール等で伝えて頂いてもかまいません。

授業科目	心理測定法				
担当者	松井 理直				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語聴覚士の仕事で用いられる各種心理測定法の意味に関する理解を深めると共に、人間の心理を客観的に把握する方法の習得を目指す。

■ 到達目標

言語聴覚士として必要不可欠な心理学の知識を身につけると共に、国家試験問題に対応できる応用力を身につけること。

■ 授業計画

- 第1回 心理テストの特徴とテストの信頼性・再現性。
- 第2回 精神物理学的測定法（1）—調整法
- 第3回 精神物理学的測定法（2）—極限法と恒常法
- 第4回 尺度構成について。
- 第5回 一対比較法と感覚尺度。
- 第6回 Weber の法則について
- 第7回 Fechner の法則について
- 第8回 Weber-Fechner の法則と音響学の関係
- 第9回 Stevens のベキ法則について
- 第10回 信号検出理論について
- 第11回 統計学の基礎
- 第12回 各種統計学の考え方
- 第13回 各種心理テスト法の特徴について
- 第14回 認知能力とことばの心理
- 第15回 心理測定法の総復習

■ 評価方法

筆記試験 80%、小テスト 20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間 1 時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、1 時間程度。

■ 教科書

書 名：プリントを配布

■ 参考図書

--

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。
質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。
小テストを含む試験時に不正な行為があったと認められた者については、規定に定める第16条を適用し、当期科目の全ての試験を無効にする。

■ 講義受講にあたって

授業科目	言語学 I (音声学・形態論)				
担当者	松井 理直				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

日本語という言語の特徴をよく理解し、言語障害の分析に応用する。

■ 到達目標

日本語の音声・文字について、習熟する。

■ 授業計画

- 第1回 言語とは何か
- 第2回 構音器官について
- 第3回 国際音声記号の考え方
- 第4回 発声（有声・無声）と声帯の特性
- 第5回 調音方法の詳細
- 第6回 調音位置の詳細
- 第7回 日本語の母音について
- 第8回 日本語の無声阻害音の発音について
- 第9回 日本の濁音の特徴
- 第10回 その他の日本語分節音の特徴
- 第11回 アクセントとイントネーションについて
- 第12回 東京方言とアクセント核
- 第13回 日本語のそのほかの方言アクセントとイントネーション
- 第14回 文字について
- 第15回 漢字の種類とかな文字の特徴

■ 評価方法

筆記試験 80%、小テスト 20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間 1 時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、1 時間程度。

■ 教科書

書 名：日本語音声学入門
 著者名：斎藤純男
 出版社：三省堂

■ 参考図書

--

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。
質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。
小テストを含む試験時に不正な行為があったと認められた者については、規定に定める第16条を適用し、当期科目の全ての試験を無効にする。

■ 講義受講にあたって

授業科目	言語学Ⅱ（文法・意味・社会言語学）				
担当者	松井 理直				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

日本語という言語の特徴をよく理解し、言語障害の分析に応用する。

■ 到達目標

日本語の形態現象・文法・意味について習熟する。

■ 授業計画

- 第1回 形態素の概念
- 第2回 日本語の語種について
- 第3回 同意語と下位語・語彙の構造について
- 第4回 形態素と語の関係
- 第5回 日本語の複合名詞・複合動詞について
- 第6回 動詞形態素の特性
- 第7回 テンスとアスペクト
- 第8回 ヴォイスと極性
- 第9回 特殊なヴォイスとモダリティ
- 第10回 日本語の構造
- 第11回 生成文法の考え方
- 第12回 日本語の意味について
- 第13回 比喩と言語理解
- 第14回 ムードとダイクシス
- 第15回 その他の意味現象

■ 評価方法

筆記試験 80%、小テスト 20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間 1 時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、1 時間程度。

■ 教科書

書 名：日本語音声学入門
 著者名：斎藤純男
 出版社：三省堂

■ 参考図書

--

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。
質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。
小テストを含む試験時に不正な行為があったと認められた者については、規定に定める第16条を適用し、当期科目の全ての試験を無効にする。

■ 講義受講にあたって

授業科目	音声学				
担当者	松井 理直				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	2 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

音声の構音と音響特性について正確な知識を習得する

■ 到達目標

発音記号・音節とモーラ・アクセントとイントネーション・音声の音響特性について習熟する

■ 授業計画

- 第1回 音声器官の復習
- 第2回 IPA 発音記号と構音障害の発音記号について
- 第3回 舌の特性
- 第4回 調音方法の分類
- 第5回 子音の詳細 (1)
- 第6回 子音の詳細 (2)
- 第7回 母音について
- 第8回 二重調音と二次的調音
- 第9回 各種音声変異について
- 第10回 日本語の分節音 (1)
- 第11回 日本語の分節音 (2)
- 第12回 日本語の分節音 (3)
- 第13回 母音無声化について
- 第14回 日本語のモーラと音節
- 第15回 重音節の意味
- 第16回 アクセントとイントネーション
- 第17回 東京方言名詞アクセントの特徴
- 第18回 動詞・形容詞のアクセント
- 第19回 イントネーションの詳細
- 第20回 リズム・ポーズ・話速
- 第21回 プロミネンスとインテンシティ
- 第22回 音韻論：音素の考え方
- 第23回 相補分布と最小対立
- 第24回 弁別素性と音韻理論の基本
- 第25回 音声と形態現象
- 第26回 動詞を巡る形態現象
- 第27回 ヴォイス・アスペクト・テンス・モダリティ
- 第28回 母音の音響特性に関する復習
- 第29回 子音の音響特性に関する復習
- 第30回 アクセントと基本周波数

■ 評価方法

筆記試験 80%、小テスト 20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間1時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、1時間程度。初回の授業までに、1年生で学んだ「言語学」「構音障害」の内容をよく復習しておいてください。

■ 教科書

書名：1年次に用いた「日本語音声学」の教科書とプリントを使用します。

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。

質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。

小テストを含む試験時に不正な行為があったと認められた者については、規定に定める第16条を適用し、当期科目の全ての試験を無効にする。

■ 講義受講にあたって

授業科目	音響学 I (一般音響学)				
担当者	松井 理直				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

音の周波数・音圧に関する基本事項を理解する。

■ 到達目標

周波数・波長の計算、dB の計算方法とその意味することに精通する。

■ 授業計画

- 第1回 音とは何か
- 第2回 振動の伝播と音圧波形
- 第3回 原波形の見方：音圧波形と粒子速度波形
- 第4回 周波数の可聴範囲と周波数・周期の計算
- 第5回 波長と周波数の計算
- 第6回 周波数レベル：オクターブの概念
- 第7回 音の高さ：mel 尺度
- 第8回 音の強さと音圧
- 第9回 デシベルの基本計算
- 第10回 強さレベルと音圧レベル
- 第11回 聴力レベルと聴覚検査関係
- 第12回 感覚レベルと聴覚障害
- 第13回 等ラウドネス曲線と音の大きさ
- 第14回 ソーン尺度と音圧との関係
- 第15回 複合音の特性

■ 評価方法

筆記試験 80%、小テスト 20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間 1 時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、1 時間程度。

■ 教科書

書 名：プリントを配布

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。
 質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。
 小テストを含む試験時に不正な行為があったと認められた者については、規定に定める第16条を適用し、当期科目の全ての試験を無効にする。

■ 講義受講にあたって

授業科目	音響学Ⅱ（音響音声学・聴覚心理学）				
担当者	松井 理直				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

音声の音響的特徴について理解する。

■ 到達目標

日本語音声のフォルマントをはじめとした音響特性について正しく理解する。

■ 授業計画

- 第1回 調波複合音と非調波複合音
- 第2回 倍音と missing fundamental
- 第3回 聴覚の時間説と場所説
- 第4回 線スペクトルと連続スペクトル
- 第5回 短時間スペクトルについて
- 第6回 音源フィルタ理論
- 第7回 声帯のスペクトルの特性
- 第8回 共鳴という現象
- 第9回 閉管と開管の共鳴特性
- 第10回 中舌母音の共鳴特性の計算
- 第11回 日本語5母音の音響特性
- 第12回 スペクトログラムと接近音の音響特性
- 第13回 摩擦音と破裂音の音響特性
- 第14回 音声知覚について
- 第15回 マスキングとデジタル音声処理

■ 評価方法

筆記試験 80%、小テスト 20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習時間 1 時間程度。復習時間は個人の理解度によるが、1 時間程度。

■ 教科書

書 名：プリントを配布

■ 参考図書

■ 留意事項

授業中に分からないことがあれば、必ずその場で質問をすること。
 質問は大歓迎なので、授業中に可能な限り内容を理解するようにしてください。
 小テストを含む試験時に不正な行為があったと認められた者については、規定に定める第16条を適用し、当期科目の全ての試験を無効にする。

■ 講義受講にあたって

授業科目	言語発達学				
担当者	齋藤 典昭				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

子どもの発達の中でも0歳～学齢までの言語の発達について学びます。前言語期・単語獲得期・前期構文獲得期・中期構文獲得期と進んでいきます。コミュニケーションはことばの前からあるのだろうか？どんなことばから覚えていくのだろうか？話せるようになるのはいつ頃か？字を読んだり書いたりできるのはいつ頃か？ことばを育むにはどうしたらよいのか。これらのことは、ことばの障害とどのような関係にあるのか。といったことを学びます。

■ 到達目標

1. 年齢を聞いて、その年齢の言語発達について説明できる。
2. 子どもを観察し、その子の言語発達について概要を評価できる。
3. 言語発達についての基礎知識を獲得したことで、言語発達障害を理解できる。

■ 授業計画

- 第1回 ガイダンス。言語発達の大きな流れ。
- 第2回 コミュニケーションの発達。
- 第3回 コミュニケーションの発達。音声知覚の発達。
- 第4回 音声知覚の発達。
- 第5回 音声知覚の発達。映像資料視聴。
- 第6回 言語音の産生。喃語の発達。
- 第7回 喃語の発達。
- 第8回 初語。
- 第9回 語彙獲得の第1第2段階。
- 第10回 語意味の獲得。
- 第11回 統語の発達。形態の発達。
- 第12回 会話能力の発達。
- 第13回 会話能力の発達。語りの能力の発達
- 第14回 読み書き能力の発達。
- 第15回 言語発達における危険な徴候。質問－応答関係検査。

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・ 次回の授業内容と準備を伝えるので、それにそって教科書、資料等を事前に読んでおくこと。
- ・ 子どもの言語発達の視野を広げるために、URL：<http://www.playingwithwords365.com> の記事 speech and language 101を参照しますので、事前に目を通して慣れておいてください。

■ 教科書

書名：標準言語聴覚障害学 言語発達障害学

著者名：藤田郁代 監修

出版社：医学書院

書名：言語聴覚士テキスト第3版

著者名：大森, 永井, 深浦, 渡邊 編

出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

授業の進行に応じて補講が加わるかもしれません。

■ 講義受講にあたって

授業科目	リハビリテーション概論				
担当者	ST 教員・他	(オムニバス)			
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

リハビリテーションの概要についての講義と言語聴覚障害の方との対話会を行う。

■ 到達目標

リハビリテーションの考え方について知る。

言語聴覚障害者とのコミュニケーションについて理解を深め、コミュニケーションに関する自己の課題を知る。言語聴覚障害の方との対話を通じて、リハビリテーションへの取り組みや生活の実際を知る。

■ 授業計画

- 第1回 リハビリテーションとは
リハビリテーションの考え方とその概要
- 第2回 対話会の実施にあたって
対話会の意義と取り組むべき課題について
- 第3回 第1回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第4回 第1回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第5回 第1回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第6回 第2回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第7回 第2回 言語聴覚障害の方との対話会
- 第8回 第2回 言語聴覚障害の方との対話会
対話会を振り返って -コミュニケーションの課題-

■ 評価方法

レポート100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

グループで対話会の準備を行う。また、終了後は対話会のビデオを見ながらレポートを作成する。参加される方の時代背景（戦前・前後、それ以降）について調べておくこと。

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	社会保障制度				
担当者	山本 永人				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

わが国の社会保障制度、および社会福祉の理念、歴史、サービスのあり方等を概説する。

■ 到達目標

言語聴覚士として持つべき基本的な社会福祉の知識や価値観を修得する。国家試験対策としても重要なキーワードの理解をする。言語聴覚士の専門性と関連させながら、わが国の社会保障制度や社会福祉サービスの歴史、意義、構成について口述できる力を獲得する。

■ 授業計画

- 第1回 社会福祉の定義とその専門性
- 第2回 障害者福祉の理念
- 第3回 ICF とインクルージョン
- 第4回 社会福祉の歴史 (1)
- 第5回 社会福祉の歴史 (2)
- 第6回 社会保険制度 (1) 医療保険①
- 第7回 社会保険制度 (1) 医療保険②
- 第8回 社会保険制度 (2) 年金保険①
- 第9回 社会保険制度 (2) 年金保険②
- 第10回 社会保険制度 (3) 労働保険
- 第11回 社会保険制度 (4) 介護保険①
- 第12回 社会保険制度 (4) 介護保険②
- 第13回 社会保険制度 (4) 介護保険③
- 第14回 障害者の福祉サービス①
- 第15回 障害者の福祉サービス②

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予習については、各回に該当する分野の教科書を熟読しておくこと。
復習については、各回で配られるプリントの空欄に赤で記入するキーワードや法律をかならず、教科書や小六法などを引用し確認すること。

■ 教科書

書 名：系統看護学講座 専門基礎分野「社会保障・社会福祉」健康支援と社会保障制度③
著者名：福田 素生・池本 美和子 他
出版社：医学書院

■ 参考図書

書名：はじめての社会保障 福祉を学ぶ人へ 最新版
著者名：椋野 美智子・田中 耕太郎
出版社：有斐閣アルマ

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

国家試験対策を重視します。配布されたプリントはそのなかで覚えるべき制度や法律、人名と言ったキーワードを示しています。また、単に受験対策的な勉強のみならず、社会福祉や社会保障の意義や重要性をしっかりと考察してください。

授業科目	医療福祉教育・関係法規				
担当者	山本永人・藤井達也・吉見剛二				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・わが国の社会保障制度、および社会福祉の理念、歴史、サービスのあり方等を概説する。関連する法律や制度についての解説を行う。(山本)
- ・聴覚障害者の願いやニーズに寄り添った支援を！ ～専門施設での実践を通して～ (吉見)
- ・言語聴覚士に関する法規、言語聴覚士法の成り立ちに関する講義を行う。(藤井)

■ 到達目標

- ・言語聴覚士として持つべき基本的な社会福祉の知識や価値観を修得する。国家試験対策としても重要なキーワードの理解をする。言語聴覚士の専門性と関連させながら、わが国の社会保障制度や社会福祉サービスの歴史、意義、構成について口述できる力を獲得する。(山本)
- ・願いに寄り添う支援とは何か？ そのために支援者として対象者の理解と支援時の配慮やあるべき姿勢を学ぶ。機能訓練中心ではなく、「生きがいと豊かな暮らし、人生を支える」ことの重要性を学ぶ。(吉見)

■ 授業計画

- 第1回 公的扶助とその関係法規 (山本)
- 第2回 児童福祉とその関係法規 (山本)
- 第3回 社会福祉法と特別支援教育 (山本)
- 第4回 権利擁護に関する関係法規 (山本)
- 第5回 大阪での聴覚障害者の専門施設づくりの歴史(親・関係者の願い、施設建設運動等)と理念を重視した実践の報告、多様な支援・実践を通じて、対象者が成長・発達していく姿・事例を紹介。手話を使いながらの講義① (吉見)
- 第6回 大阪での聴覚障害者の専門施設づくりの歴史(親・関係者の願い、施設建設運動等)と理念を重視した実践の報告、多様な支援・実践を通じて、対象者が成長・発達していく姿・事例を紹介。手話を使いながらの講義② (吉見)
- 第7回 言語聴覚士法の歴史 (藤井)
- 第8回 職能組織について (藤井)

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習(予習・復習等)について

予習については、各回に該当する分野の教科書を熟読しておくこと。
 復習については、各回で配られるプリントの空欄に赤で記入するキーワードや法律をかならず、教科書や小六法などを引用し確認すること。

■ 教科書

書名：系統看護学講座 専門基礎分野「社会保障・社会福祉」健康支援と社会保障制度③
 著者名：福田 素生・池本 美和子 他
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書名：はじめての社会保障
著者名：椋野美智子・田中耕太郎
出版社：有斐閣アルマ

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

国家試験対策を重視します。配布されたプリントはそのなかで覚えるべき制度や法律、人名と言ったキーワードを示しています。また、単に受験対策的な勉強のみならず、社会福祉や社会保障の意義や重要性をしっかりと考察してください。

授業科目	言語聴覚障害学概論				
担当者	森田婦美子・片岡紳一郎・ST 教員				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・ 神経系や発声発語器官、頭頸部解剖及び人体のしくみについての導入
- ・ 言語聴覚療法の各領域の臨床について現任者が講義を行う
- ・ I 期実習ガイダンス

■ 到達目標

- ・ 神経系や発声発語器官、頭頸部及び人体のしくみについての概要を理解する
- ・ 様々な臨床現場における言語聴覚療法の臨床を知る
- ・ 実習に先立ち、言語聴覚士として必要な各領域の知識や技術の基礎的事項を身につける

■ 授業計画

- 第1回 神経系や発声発語器官、頭頸部解剖（大根）
- 第2回 人体機能の仕組み：心臓（森田）
- 第3回 人体機能の仕組み：腎臓（森田）
- 第4回 人体機能の仕組み：肝臓（森田）
- 第5回 人体機能の仕組み：膵臓（森田）
- 第6回 言語聴覚士の現場の声をきく - 臨床の実際を知る（1）
- 第7回 言語聴覚士の現場の声をきく - 臨床の実際を知る（2）
- 第8回 言語聴覚士の現場の声をきく会から学んだこと 発表
- 第9回 I 期実習ガイダンス トランスファーと車椅子操作 講義及び演習（1）（片岡）
- 第10回 I 期実習ガイダンス トランスファーと車椅子操作 講義及び演習（2）（片岡）
- 第11回 I 期実習ガイダンス トランスファーと車椅子操作 講義及び演習（3）（片岡）
- 第12回 I 期実習ガイダンス バイタルサインのみかた（1）（森田）
- 第13回 I 期実習ガイダンス バイタルサインのみかた（2）（森田）
- 第14回 I 期実習ガイダンス 感染症について（森田）
- 第15回 I 期実習ガイダンス 感染症における注意点（森田）

■ 評価方法

小テスト100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

グループでの課題を課す。積極的に参加すること。

■ 教科書

書 名：図解 言語聴覚療法技術ガイド

著者名：深浦順一 編集主幹

出版社：文光堂

書 名：言語聴覚士テキスト

出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

臨床実習 I シラバスも参照すること。

ST 専任教員による補習数コマあり。

小テストを含む試験時に不正な行為があったと認められた者については、規定に定める第16条を適用し、当期科目の全ての試験を無効にする。

■ 講義受講にあたって

授業科目	言語聴覚障害診断学				
担当者	森田婦美子・高木卓司・中村靖子・他				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ①運動障害性発話障害が生じる神経的基礎を踏まえ、障害レベルに応じた評価を行い、適切な訓練目標を設定して実施できるようにする。運動障害性発話障害の原因と、それに応じた発声発語器官の形態。機能の検査、発話の検査による評価と訓練、および発話補助手段について述べる（講師非公表）。
- ②一日見学実習施設の概要、過去の実習の様子の説明。療養型医療施設における摂食嚥下分野の援助について説明。また、経口摂取の重要性について学生同士のディスカッション、経管栄養が高齢者に及ぼす影響、実際の症例についての説明。（高木）

■ 到達目標

運動障害性発話障害が生じる神経的基礎を踏まえて発声発語器官の形態、機能の検査、発話の検査による評価ができるようになる（講師非公表）。

一般的な療養型医療施設における ST の状況を理解し、どのような ST になるかという目標設定、材料の一つを得る。（高木）

■ 授業計画

- 第1回 導入：運動障害性発話障害の障害レベルと評価について（講師非公表）
- 第2回 発話の検査（標準ディサースリア検査、発話明瞭度検査）（講師非公表）
- 第3回 呼吸機能、発声機能の評価（講師非公表）
- 第4回 鼻咽腔閉鎖機能の評価（講師非公表）
- 第5回 口腔構音機能の評価（運動範囲）（講師非公表）
- 第6回 口腔構音機能の評価（運動速度）（講師非公表）
- 第7回 口腔構音機能の評価（筋力）（講師非公表）
- 第8回 機器を用いた検査、反射検査など（講師非公表）
- 第9回 VTRによる症例呈示と検査の実施（講師非公表）
- 第10回 VTRによる症例呈示と検査の要約（講師非公表）
- 第11回 評価結果のまとめと所見作成（講師非公表）
- 第12回 評価結果の分析と考察（講師非公表）
- 第13回 一日見学実習施設の概要、過去の実習の様子の説明。
療養型医療施設における摂食嚥下分野の援助について説明。（高木）
- 第14回 経口摂取の重要性について学生同士のディスカッション。
経管栄養が高齢者に及ぼす影響、実際の症例についての説明。（高木）
- 第15回 II期実習ガイダンス カルテのみかた（森田）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

予め授業前にテキストの準備物と評価手順と基準の箇所について目を通してきてください。授業後に配布資料とテキストを読んで復習しておいてください。事前に検査で使用する物品の作成など準備が必要です。（予習、準備 1.0時間）

■ 教科書

書名：標準ディサースリア検査

著者名：西尾正輝

出版社：インテルナ出版

■ 参考図書

■ 留意事項

集中的に連続して講義するのでなるべく出席するようにしてください。

一日嚙下実習あり。臨床実習Ⅱのシラバスも参照すること。

■ 講義受講にあたって

事前に、基礎科目で学習する脳神経の基礎知識を理解しておくこと。

授業科目	言語聴覚障害特論				
担当者	山本一郎・名徳倫明・江頭智香子・五味田裕・余川ゆきの・ST 教員 他				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	2 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ①運動障害性発話障害が生じる神経的基礎を踏まえ、ディサースリアの障害レベルに応じた適切な訓練目標を設定して実施できるようにする。ディサースリア検査の評価データから総合的な分析を適切に行い、計画立案の考え方について述べる。(講師非公表)
- ②口腔の果たす2大機能である食べるということ、話すことについてその発生と発達について学ぶ。(山本)
- ③言語聴覚領域を行うに当たって知っておくべき薬の知識について学ぶ。(名徳・五味田)
- ④虐待問題について講義を行う。(江頭)
- ⑤摂食・嚥下リハビリテーションを行う上で、器質的口腔ケアによる口腔内保清は必須である。今授業では、口腔内アセスメント方法から、具体的な器質的口腔ケア方法について学ぶ。(余川)
- ⑥国家試験を想定し、領域別問題に取り組む。(ST 教員)

■ 到達目標

- ①ディサースリア検査の評価データからディサースリアの障害レベルに応じて、総合的な分析を適切に行い、計画立案ができるようにする。(講師非公表)
- ②発生と発達の視点から口腔機能を学び、様々な病態に対処できる知識を養う。(山本)
- ③薬物治療で言語聴覚領域に影響する薬について把握する。(名徳・五味田)
- ④虐待について理解を深める。(江頭)
- ⑤口腔内アセスメントが出来るようになる。器質的口腔ケアが出来るようになる。(余川)
- ⑥国家試験の受験にあたって受験対策を立て、実践できるようになる。(ST 教員)

■ 授業計画

- 第1回 総論：ディサースリアの障害レベルとそれに対応した訓練について (講師非公表)
- 第2回 呼吸機能の治療アプローチ (講師非公表)
- 第3回 発声機能の治療アプローチ (講師非公表)
- 第4回 鼻咽腔閉鎖機能の治療アプローチ (講師非公表)
- 第5回 口腔構音機能の治療アプローチ (講師非公表)
- 第6回 発話速度の調節法1 (講師非公表)
- 第7回 発話速度の調節法と構音訓練など (講師非公表)
- 第8回 まとめ (講師非公表)
- 第9回 顔面・口腔の発生 口腔機能の発達 (山本)
- 第10回 唇顎口蓋裂児における哺乳・摂食障害とその対処法 (山本)
- 第11回 唇顎口蓋裂児者における異常構音の分析と治療について
エレクトロパラトグラフィー (EPG) を用いた異常構音の分析と治療について (山本)
- 第12回 薬の基礎知識①用法・用量など (名徳)
- 第13回 薬の基礎知識②副作用・相互作用など (名徳)
- 第14回 薬の薬理作用 (摂食・嚥下に影響する薬剤) (名徳)
- 第15回 輸液の基礎と栄養 (名徳)
- 第16回 医療現場での具体的薬物治療とそれに関わる Q & A について解説 (五味田)
- 第17回 言語聴覚機能に影響する薬、特に精神疾患を含む中枢神経系の疾患に使用される薬並びに化学療法薬等の副作用を中心に解説① (五味田)
- 第18回 言語聴覚機能に影響する薬、特に精神疾患を含む中枢神経系の疾患に使用される薬並びに化学療法薬等の副作用を中心に解説② (五味田)

- 第19回 子供の虐待 歴史、制度の変遷、虐待の種類（江頭）
- 第20回 虐待に関わる発達の課題（被虐待児の心理的特徴等）（江頭）
- 第21回 虐待を取り巻く社会的背景（江頭）
- 第22回 虐待に対しての対応 被虐待児の支援について（江頭）
- 第23回 オリエンテーション（歯科とは）～なぜ口腔ケアが必要なのか～（余川）
- 第24回 口腔ケアの手技（器質的、機能的口腔ケア実習）（余川）
- 第25回 言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～（ST 教員）
領域別問題の実践 1
- 第26回 言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～（ST 教員）
領域別問題の実践 2
- 第27回 言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～（ST 教員）
領域別問題の実践 3
- 第28回 言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～（ST 教員）
領域別問題の実践 4
- 第29回 言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～（ST 教員）
領域別問題の実践 5
- 第30回 言語聴覚士のための基礎知識 ～国家試験対策～（ST 教員）
領域別問題の実践 6

■ 評価方法

筆記試験90%、レポート10%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・ 授業後に配布資料とテキストのそれぞれの治療アプローチ、訓練手技についての箇所を読み直して、実際に友人を対象に実施し、講義で行った実習の復習を行うこと。（復習1.0時間）
- ・ 事前に指定テキストの基礎編（前半）に目を通しておくことを推奨する。

■ 教科書

書 名：標準ディサースリアテキスト
著者名：西尾正輝
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

集中的に連続して講義するのでなるべく出席するようにしてください。

■ 講義受講にあたって

事前に、標準ディサースリア検査の実施手順を復習しておくこと。

授業科目	失語症Ⅰ（基礎）				
担当者	大西 環				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

失語症とはどのような言語障害であるか、その基礎的な内容を中心に講義を行う。

■ 到達目標

失語症の言語症状やタイプ分類について理解し、臨床の観察点とすることができる。

■ 授業計画

- 第1回 失語症とは 定義と障害の特徴、臨床の流れ
- 第2回 言語モデルについて
- 第3回 失語症の言語症状 流暢性と非流暢性
- 第4回 失語症の言語症状 発話の障害について①
- 第5回 失語症の言語症状 発話の障害について②
- 第6回 失語症の言語症状 聴覚的理解障害について
- 第7回 失語症の言語症状 読み書きの障害について
- 第8回 失語症のタイプ分類①
- 第9回 失語症のタイプ分類②
- 第10回 失語症のタイプ分類③
- 第11回 純粹失読、純粹失書、失読失書
- 第12回 症状の観察の仕方①
- 第13回 症状の観察の仕方①
- 第14回 症状の観察の仕方①
- 第15回 まとめと復習

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎回の復習を必ず行うこと。
疑問点は随時解決できるよう、できるだけ次の講義時間に質問すること。

■ 教科書

書 名：脳卒中後のコミュニケーション障害
著者名：竹内愛子 川内十郎 編著
出版社：協同医書出版社

■ 参考図書

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

失語症理解の基礎となる科目です。失語症Ⅱ（評価）、失語症Ⅲ（訓練）、失語症Ⅳ（臨床講義）につながるようしっかり取り組んでください。

授業科目	失語症Ⅱ（評価）				
担当者	平林容子・大根茂夫			（オムニバス）	
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

失語症の治療・訓練・指導に必要な各種失語症検査法の概略を学ぶ。
検査から評価の仕方、結果の解釈の仕方、訓練法の立案を学ぶ。
各種失語症検査を標準的な実施方法で実施できるように演習を行う。

■ 到達目標

各種失語症検査の概要を知る。
各種失語症検査および関連検査を標準的な方法で実施できる。
検査結果から、結果の解釈、問題点の抽出、訓練の立案ができる。
評価報告書が書ける。

■ 授業計画

- 第1回 急性期・回復期・維持期の失語症患者の容態、医学的情報の収集の仕方、面接の仕方
- 第2回 スクリーニング検査の意義と実施方法
- 第3回 標準失語症検査（SLTA）の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に生かすみかた（1）
- 第4回 標準失語症検査（SLTA）の検査法概略、結果の解釈の仕方、言語治療に生かすみかた（2）
- 第5回 WAB 失語症検査の概略
- 第6回 重度失語症検査の概略
- 第7回 標準失語症検査補助検査（SLTA - ST）の概略
- 第8回 失語症語彙検査の概略
- 第9回 実用コミュニケーション能力検査（CADL）の概略
- 第10回 失語症構文検査、トークンテストの概略
- 第11回 語音弁別検査、モーラ分解・抽出検査の概略
- 第12回 鑑別診断、経過と予後、訓練・援助の方針の決定
- 第13回 評価報告書の書き方
- 第14回 症例演習（1）
- 第15回 症例演習（2）

■ 評価方法

筆記試験（100点満点）、実技試験（100点満点） 筆記試験、実技試験とも60点以上が合格

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業で各種検査法の手技の説明を受けた後、学生同士でペアを作り、お互いに検査者、被検者になり検査練習を行うこと。ペアを変え、3例以上の検査練習を行うこと。検査練習は空き時間を有効に使うこと。すべての検査マニュアルを熟読し暗記すること。

■ 教科書

書名：標準失語症検査マニュアル 改訂第2版
著者名：日本高次脳機能障害学会（旧 日本失語症学会）
出版社：新興医学出版社

書名：なるほど!失語症の評価と治療 -検査結果の解釈から訓練法の立案まで-
著者名：編著 小嶋知幸 執筆 大塚裕一 宮本恵美
出版社：金原出版株式会社

書名：病気がみえる vol.7 脳・神経 第2版
著者名：医療情報科学研究所
出版社：株式会社 メディックメディア

■ 参考図書

■ 留意事項

必要に応じて各種失語症検査の実施方法を習得するための補講を行います。
本授業は臨床実習前ガイダンスと密接に連携している。

■ 講義受講にあたって

失語症Ⅲ（訓練）、失語症Ⅳ（臨床講義）につながるようしっかりと取り組んでください。

授業科目	失語症Ⅲ（訓練）				
担当者	橋谷 玲子				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

失語症の障害構造を理解し、その訓練方法とケースごとの対処方法を学習する。

■ 到達目標

ケースを観察することで、持っている知識を生かし、コミュニケーション方法、訓練方法を立案できるようになることを目指す。

■ 授業計画

- 第1回 失語症の臨床
- 第2回 コミュニケーション方法と目標設定
- 第3回 症例1の評価 ブローカ失語
- 第4回 症例1の訓練
- 第5回 症例2の評価 ウェルニッケ失語
- 第6回 症例2の訓練
- 第7回 症例3の評価 他の高次脳機能障害を合併した失語症
- 第8回 症例3の訓練
- 第9回 症例4の評価 側性化の特殊な失語症
- 第10回 症例4の訓練
- 第11回 症例5の評価 進行性失語
- 第12回 症例5の訓練
- 第13回 症例6の評価 再帰性発話
- 第14回 症例6の訓練
- 第15回 生活に合わせたコミュニケーション方法の応用

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習。症例の特徴、訓練方法、重要ポイントを心に留め置く。

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	失語症Ⅳ（臨床講義）				
担当者	大根茂夫・平林容子・大西環・中村靖子				（オムニバス）
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ①失語症者の機能障害・能力障害・社会参加、QOL について考え、支援のポイントを学ぶ。
- ②失語症者に対し、スクリーニング検査、総合的失語症検査、掘り下げ検査を実施し、評価、訓練プログラムの立案、訓練までを行い、グループで報告書を作成し発表する。適宜次の内容を指導する。（失語症回復の理論と介入の実際、回復時期に合わせた援助、ゴール設定とプログラム立案、訓練の実施、評価報告書の作成）

■ 到達目標

各種失語症検査が標準的な実施方法で実施できる。
 検査結果から評価（結果の解釈、問題点の抽出）ができる。
 問題点に対し具体的な訓練法を立案できる。
 訓練に必要な教材を作成し、訓練を実施できる。
 評価報告書を作成し発表できる。

■ 授業計画

第1回	臨床講義1回目	セッションの準備
第2回	臨床講義1回目	失語症者に検査を実施する
第3回	臨床講義1回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック
第4回	臨床講義2回目	セッションの準備
第5回	臨床講義2回目	失語症者に検査を実施する
第6回	臨床講義2回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック
第7回	臨床講義3回目	セッションの準備
第8回	臨床講義3回目	失語症者に検査を実施する
第9回	臨床講義3回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出）を作成 グループによる発表とフィードバック
第10回	臨床講義4回目	セッションの準備
第11回	臨床講義4回目	失語症者に検査又は訓練を実施する
第12回	臨床講義4回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出又は訓練プログラム）を作成 グループによる発表とフィードバック
第13回	臨床講義5回目	セッションの準備
第14回	臨床講義5回目	失語症者に検査又は訓練を実施する
第15回	臨床講義5回目	グループ毎にレポート（結果の解釈と問題点の抽出又は訓練プログラム）を作成 グループによる発表とフィードバック

■ 評価方法

筆記試験 60% 症例レポート 40% 両得点の合計で合否を決める。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

基本的にはグループ活動であるので、各自が積極的に意見を出し合い、レポートにまとめること。他人任せにしない。

本授業は総合的な学習であるので、失語症Ⅰ～Ⅲで学習した内容が基礎となる。実際の患者様に検査を行い、評価・訓練を考えていくためには、基礎知識が重要であり、Ⅰ～Ⅲの復習とともに、さらに基礎知識を広げていくことが必要である。また、積極的に研究論文を読み込んでいく必要もある。

■ 教科書

書名：高次脳機能障害の理解と診察

著者名：編集者：平山 和美

出版社：株式会社 中外医学社

書名：言語聴覚士ドリルプラス失語症

著者名：編集者：大塚裕一 宮本恵美

出版社：診断と治療社

■ 参考図書

■ 留意事項

活発なグループワーク・質問・討議を期待します。

■ 講義受講にあたって

臨床実習Ⅲに繋がる講義です。しっかりと受講してください。

授業科目	高次脳機能障害 I (概論)				
担当者	森岡悦子・中谷謙				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、注意、記憶、認知、行為、視空間認識、行為、遂行など、大脳の機能を理解し、それらの機能が損傷された結果生じる高次脳機能障害の臨床像と障害機序を学ぶ。

■ 到達目標

1. 大脳機能について、正常のメカニズムを理解することができる。
2. 各々の高次脳機能障害について、臨床像を説明することができる。

■ 授業計画

- 第1回 高次脳機能障害の概要：高次脳機能に関わる中枢神経系の機能と情報処理システム (森岡)
- 第2回 注意の機能と特性 (森岡)
- 第3回 記憶の種類、記憶の回路とメカニズム、病変別記憶障害の特徴 (森岡)
- 第4回 失行、行為、行動の障害 (中谷)
- 第5回 失認と関連症状 (森岡)
- 第6回 無視症候群・外界と身体の処理に関わる空間性障害 (中谷)
- 第7回 前頭前野と遂行機能障害・外傷性脳損傷による高次脳機能障害 (森岡)
- 第8回 高次脳機能障害の臨床像のまとめ (森岡)

■ 評価方法

筆記試験80%、平常点(小テスト、授業への積極性)20%

■ 授業時間外の学習(予習・復習等)について

授業中に示された要点を中心に、よく復習すること。

■ 教科書

書名：高次脳機能障害学 第2版
 著者名：石合純夫
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書名：高次脳機能障害学
 著者名：長谷川賢一
 出版社：建帛社

■ 留意事項

小テストを含む試験時に不正な行為があったと認められた者については、規定に定める第16条を適用し、当期科目の全ての試験を無効にする。

■ 講義受講にあたって

--

授業科目	高次脳機能障害Ⅱ（評価）				
担当者	森岡悦子・中谷謙・圓越広嗣				（オムニバス）
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、高次脳機能障害の症状に関する知識を基に、高次脳機能障害の各検査の目的と実施方法、結果の解釈法を理解し、障害像の捉え方を学ぶ。また症状分析に必要な情報と合わせて考察し、高次脳機能障害の症状のまとめ方を修得する。

■ 到達目標

1. 高次脳機能検査の目的と実施方法を学び、正しく施行することができる。
2. 症状に応じて、必要な掘り下げ検査を選択し、実施することができる。
3. 検査結果を、正しく解釈し、障害像を捉えることができる。
4. 検査結果から高次脳機能障害の症状をまとめることができる。

■ 授業計画

- 第1回 認知機能の評価（1）：実施演習と解釈（レーブン色彩マトリックス）（森岡）
- 第2回 認知機能の評価（2）：実施演習と解釈（コース立方体組合せテスト）（森岡）
- 第3回 認知機能の評価（3）：実施演習と解釈（MMSE、HDS-R）（森岡）
- 第4回 注意機能（1）：注意の特性と、注意機能障害の臨床像（森岡）
- 第5回 注意機能（2）：標準注意検査法・標準意欲評価法の目的と手順の理解、実施（森岡）
- 第6回 注意機能（3）：標準注意検査法・標準意欲評価法の結果の解釈、症状のまとめ（森岡）
- 第7回 記憶（1）：記憶障害の病巣と症状との関係（圓越）
- 第8回 記憶（2）：リバーミード行動記憶検査（RBMT）の目的と手順の理解（圓越）
- 第9回 記憶（3）：リバーミード行動記憶検査（RBMT）の演習と結果の解釈、症状のまとめ（圓越）
- 第10回 失認（1）：視覚失認、相貌失認、地誌の見当識障害、聴覚失認、触覚失認の臨床像（森岡）
- 第11回 失認（2）：標準高次視知覚検査（VPTA）の目的と手順の理解、結果の解釈、症状のまとめ（森岡）
- 第12回 視空間障害（1）：半側空間無視、構成障害、パリント症候群（中谷）
- 第13回 視空間障害（2）：BIT 行動性無視検査の目的と実施手順の理解（中谷）
- 第14回 視空間障害（3）：BIT 行動性無視検査の演習と、結果の解釈、症状のまとめ（中谷）
- 第15回 遂行機能：前頭葉機能、外傷性脳損傷による高次脳機能障害の評価と症状のまとめ（森岡）

■ 評価方法

筆記試験80%、平常点（レポート、授業への積極性）20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業内に示された要点を中心に、よく復習すること。

■ 教科書

書 名：高次脳機能障害学 第2版
 著者名：石合純夫
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書名：標準言語障害学 高次脳機能障害学
著者名：藤田郁代・阿部晶子 編集
出版社：医学書院

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	高次脳機能障害Ⅲ（臨床）				
担当者	森岡悦子・中谷謙・圓越広嗣				（オムニバス）
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

本講義では、高次脳機能障害検査で得られた評価情報を基に、障害機序を論理的に考察する能力を修得する。また、障害機序に沿った治療プログラムの立案について学ぶ。

■ 到達目標

1. 検査結果と生活情報から、高次脳機能障害の障害機序を論理的に考察することができる。
2. 障害機序に基づき、リハビリテーションプログラムを立案することができる。

■ 授業計画

- 第1回 高次脳機能障害のリハビリテーション（森岡）
- 第2回 記憶障害の評価とリハビリテーション（森岡）
- 第3回 失認の評価とリハビリテーション（森岡）
- 第4回 半側空間無視の評価とリハビリテーション（中谷）
- 第5回 遂行機能の評価（BADS）の実施手順の理解（圓越）
- 第6回 遂行機能の評価（BADS）の解釈、症状のまとめ（圓越）
- 第7回 遂行機能の評価とリハビリテーション（中谷）
- 第8回 認知症の病型別症状と関わり方（森岡）

■ 評価方法

筆記試験80%、平常点（レポート、小テスト、授業への積極性）20%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業内に示された要点を中心に、よく復習すること。

■ 教科書

書名：高次脳機能障害学 第2版
 著者名：石合純夫
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 参考図書

書名：高次脳機能障害ポケットマニュアル 第3版
 著者名：原寛美
 出版社：医歯薬出版株式会社

■ 留意事項

小テストを含む試験時に不正な行為があったと認められた者については、規定に定める第16条を適用し、当期科目の全ての試験を無効にする。

■ 講義受講にあたって

授業科目	言語発達障害Ⅰ（援助法・基礎）				
担当者	岡崎満希子・中村靖子				（オムニバス）
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

対人援助職として仕事を進めていく上で必要な観察の視点・方法とそれらを言語化・文字化してまとめ、実習日誌や報告書やカルテ等を通して伝えることを学ぶ。第1回～第10回まで（岡崎）は、観察と記録の初歩的な事項と、主に小児領域のVTR等を活用した講義と演習を実施する。第11回～第15回まで（中村）は、成人領域のVTR等を活用した講義と演習を実施する。

■ 到達目標

臨床実習Ⅰの日誌作成を念頭に、基本的な行動観察や記述の視点・方法を習得する。

■ 授業計画

- 第1回 行動観察の理論と技法（岡崎）
- 第2回 小児領域における観察の視点1（岡崎）
- 第3回 小児領域における観察の視点2（岡崎）
- 第4回 小児の観察と記録 演習1（岡崎）
- 第5回 小児の観察と記録 演習1（岡崎）
- 第6回 小児の観察と記録 演習2（岡崎）
- 第7回 小児の観察と記録 演習2（岡崎）
- 第8回 小児の観察と記録 演習3（岡崎）
- 第9回 小児の観察と記録 演習3（岡崎）
- 第10回 小児の観察と記録 まとめ（岡崎）
- 第11回 成人の観察と記録 概要及び視点について（中村）
- 第12回 成人の観察と記録 失語症患者様VTR グループワーク 着眼点を共有する（中村）
- 第13回 成人の観察と記録 第12回の解説 失語症患者様VTR 個人ワーク（中村）
- 第14回 成人の観察と記録 第13回の解説 嚥下障害の患者様VTR グループワーク（中村）
- 第15回 成人の観察と記録 第14回の解説及び成人領域の復習（中村）

■ 評価方法

提出物100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

演習が多い講義内容となっています。講義内にて適宜、各自で取り組んでもらう課題を出す予定です。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 成人編
 著者名：深浦順一、為数哲司、内山量史
 出版社：建帛社

書 名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 小児編
 著者名：深浦順一、内山千鶴子
 出版社：建帛社

■ 参考図書

--

■ 留意事項

--

■ 講義受講にあたって

臨床実習の基盤となる観察の視点を学びます。しっかり取り組んでください。

授業科目	言語発達障害Ⅱ（概論）				
担当者	吉田紀子・齋藤典昭			（オムニバス）	
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語発達障害の基礎的な概念と各障害の特性を学ぶ。

■ 到達目標

言語発達障害の概念と特性を理解し、それぞれの言語発達障害について説明できる。

■ 授業計画

- 第1回 小児の発達と言語発達障害概論（吉田）
- 第2回 知的能力障害（吉田）
- 第3回 自閉症スペクトラム障害 ①（吉田）
- 第4回 自閉症スペクトラム障害 ②（吉田）
- 第5回 注意欠如多動性障害 ①（吉田）
- 第6回 注意欠如多動性障害 ②（吉田）
- 第7回 学習障害／発達性ディスレクシア ①（吉田）
- 第8回 学習障害／発達性ディスレクシア ②（吉田）
- 第9回 特異的言語発達障害（吉田）
- 第10回 言語発達障害のまとめ（吉田）
- 第11回 姿勢・運動の発達 基礎知識（齋藤）
- 第12回 脳性麻痺・重複障害 定義（齋藤）
- 第13回 脳性麻痺・重複障害 評価（齋藤）
- 第14回 脳性麻痺・重複障害 支援（齋藤）
- 第15回 保育所見学学習 レポート作成・提出（齋藤）

■ 評価方法

吉田の範囲は筆記試験90%、提出課題10%、なお出欠および授業態度を考慮する。齋藤の範囲は筆記試験100%で評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

教科書「言語発達障害学」の該当箇所を読んでおくこと

■ 教科書

書 名：標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第2版

著者名：藤田郁代 監修

出版社：医学書院

書 名：絵でわかる言語障害 第2版

著者名：毛東真知子

出版社：学研

書 名：言語聴覚障害診断 小児編

著者名：大塚裕一，井崎基博

出版社：医学と看護社

■ 参考図書

書名：言語聴覚士のための言語発達障害学第2版
著者名：石田宏代，石坂郁代
出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

保育所見学学習について：少子高齢化社会で子どもさんと直に接する機会は減っています。子どもさんの発達を学ぶ機会として設定しています。6月頃に実施する予定です。

■ 講義受講にあたって

授業科目	言語発達障害Ⅲ (評価法 - 基礎)				
担当者	大谷多加志・工藤芳幸				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

対象者の発達状態を適切に理解することは、小児の言語治療を行う上で非常に重要なことである。本講では小児の発達評価に最もよく用いられる検査の1つである新版 K 式発達検査2001の実施・評価を学習することを通して、小児の発達アセスメントにおける基礎的理解を深めていく (大谷)。

後半は特に言語面の評価方法を深めていく。ここでは絵画語い発達検査 (PVT-R)、LC スケール (言語・コミュニケーション発達スケール) を取り上げ、言語学的四側面の発達の理解や言語理解・言語表出・コミュニケーションの発達アセスメントを学ぶ。また、検査結果を統合・解釈し、指導目標を設定するプロセスを学ぶ (工藤)。

■ 到達目標

小児の発達アセスメントに関する基礎知識の習得、および新版 K 式発達検査2001の概要と実施・評価の学習 (大谷)。

小児の言語・コミュニケーション発達に関する評価法および指導目標設定についての基礎知識の習得 (工藤)。

■ 授業計画

- 第1回 発達アセスメントの意義と留意点 (大谷)
- 第2回 新版 K 式発達検査の概要 (大谷)
- 第3回 検査の実施手順と評価① 乳児 (大谷)
- 第4回 検査の実施手順と評価② 幼児 (大谷)
- 第5回 検査の実施手順と評価③ 幼児 (大谷)
- 第6回 検査の実施手順と評価④ 幼児 (大谷)
- 第7回 検査結果に基づく発達評価と助言、支援① (大谷)
- 第8回 検査結果に基づく発達評価と助言、支援② (大谷)
- 第9回 事例から考える発達評価・発達支援 (大谷)
- 第10回 ことばの理解に関する検査法 (絵画語い発達検査：PVT-R) (工藤)
- 第11回 LC スケール (言語・コミュニケーション発達スケール) の概要 (工藤)
- 第12回 LC スケールの実施手順と評価① 幼児期前半 (工藤)
- 第13回 LC スケールの実施手順と評価② 幼児期後半 (工藤)
- 第14回 検査結果の統合と解釈および指導目標設定① (工藤)
- 第15回 検査結果の統合と解釈および指導目標設定② (工藤)

■ 評価方法

授業後のショートレポート (100%) によって評価する (第1回～第9回、大谷)。講義時間内に実施する提出課題 (100%) により評価する。(第10回～第15回、工藤)。科目全体の最終的な評価は大谷担当分で60%、工藤担当分で40%とする。

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

必要に応じて講義中に指示をする。

■ 教科書

書名：新版 K 式発達検査2001実施手引書

著者名：生澤雅夫・松下裕・中瀬惇（編著）

出版社：京都国際社会福祉センター

書名：新版 K 式発達検査2001実施手引書

著者名：生澤雅夫・松下裕・中瀬惇（編著）

出版社：京都国際社会福祉センター

■ 参考図書

書名：言語・コミュニケーション発達の理解と支援プログラム -LC スケールによる評価から支援へ-

著者名：大伴潔・林安紀子・橋本創一・菅野敦（編著）

出版社：学苑社

書名：新版 K 式発達検査法 2001年版 発達アセスメントと支援

著者名：松下裕・郷間英世（編著）

出版社：ナカニシヤ出版

■ 留意事項

第1回～第9回までの講義内では新版 K 式発達検査2001の検査用具を使用する。事前準備等については別途連絡したい。第10回～第15回までの講義で使用する LC スケール演習用の検査用紙については事前購入ではなく、講義内資料として配布する。

■ 講義受講にあたって

授業科目	言語発達障害Ⅳ（評価法－各論）				
担当者	赤壁省吾・岡崎満希子・齋藤典昭				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・言語検査である「国リハ式〈S-S〉法」言語発達遅滞検査・訓練を学ぶ。（齋藤）
- ・言語発達障害Ⅲで学んだ新版 K 式発達検査2001を用いて実際のこどもに検査を実施し、報告書を作成する（岡崎）
- ・発達障害特性のアセスメントと支援について学ぶ（赤壁）

■ 到達目標

1. 各検査の概要を述べることができる 〈S-S 法〉（齋藤）
2. 各検査を実施することができる 〈S-S 法〉（齋藤）
3. 検査所見を作成することができる 〈S-S 法〉（齋藤）
4. 訓練案を作成することができる 〈S-S 法〉（齋藤）
5. 新版 K 式発達検査2001による全体発達評価の結果解釈、支援仮説を立てることができる（岡崎）
6. 発達障害特性のアセスメントに関する基本的なポイントがわかる（赤壁）

■ 授業計画

- 第1回 「国リハ式〈S-S 法〉言語発達遅滞検査」 検査用具に触れ、検査項目との結びつきを知る（齋藤）
- 第2回 「国リハ式〈S-S 法〉言語発達遅滞検査」 段階3-2の検査項目とその演習（齋藤）
- 第3回 「国リハ式〈S-S 法〉言語発達遅滞検査」
段階4-1, 4-2の検査項目とその演習. 用紙への転記方法（齋藤）
- 第4回 「国リハ式〈S-S 法〉言語発達遅滞検査」
段階5-1, 5-2の検査項目とその演習. 記録用紙の構成（齋藤）
- 第5回 「国リハ式〈S-S 法〉言語発達遅滞検査」 段階2の検査項目とその演習.（齋藤）
- 第6回 「国リハ式〈S-S 法〉言語発達遅滞検査」
スライドによる〈S-S 法〉知識の整理. 模擬検査〈段階3以上〉.（齋藤）
- 第7回 「国リハ式〈S-S 法〉言語発達遅滞検査」
模擬検査〈段階2〉, サマリーへの転記方法. 提出課題の説明（齋藤）
- 第8回 「国リハ式〈S-S 法〉言語発達遅滞検査」 概要を視聴, 事例検討, 訓練案の作成.（齋藤）
- 第9回 「国リハ式〈S-S 法〉言語発達遅滞検査」
事例検討, 訓練案の作成. 必要に応じ教材作成を含む（齋藤）
- 第10回 「国リハ式〈S-S 法〉言語発達遅滞検査」 模擬訓練（齋藤）
- 第11回 発達障害のアセスメントと支援①（赤壁）
- 第12回 発達障害のアセスメントと支援②（赤壁）
- 第13回 新版 K 式発達検査2001検査実技（岡崎）
- 第14回 新版 K 式発達検査2001プロフィール作成演習（岡崎）
- 第15回 発達検査演習のフィードバック・補足・まとめ（岡崎）

■ 評価方法

齋藤担当分については課題提出物40%, 演習参加行動10%で評価する。岡崎担当分については実施後の検査用紙、報告書を合わせて40%分の評価をする。赤壁担当分については授業時間内の小テストで10%分の評価をする。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・「言語発達障害学」 p.198-p.216〈S-S法〉の部分を事前に読んでおくこと。（齋藤）
- ・新版 K 式発達検査の演習形式の講義については、言語発達障害Ⅲ（評価法-基礎）の内容と検査マニュアルを復習し、実際の検査場面の記録と結果処理の仕方（採点や計算など）を確認しておいて下さい。演習は検査を実施する学生と観察室から検査用紙に記載する学生に分けます。実施する学生については、事前に担当教員との相談をして下さい。

■ 教科書

書名：新版 K 式発達検査2001実施手引き（言語発達障害Ⅲと共通）

■ 参考図書

書名：新版 K 式発達検査法2001年版発達のアセスメントと支援

著者名：松下裕，郷間英世

出版社：ナカニシヤ出版

書名：発達相談と新版 K 式発達検査—子ども・家族支援に役立つ知恵と工夫

著者名：大島剛，川畑隆，伏見真理子ほか

出版社：明石書店

書名：対人コミュニケーション行動観察フォーマット（FOSCOM）マニュアル

著者名：東川健ほか

出版社：エスコアール

書名：ひらがな文字検査（HITSS）実施マニュアル

著者名：佐竹恒夫ほか

出版社：エスコアール

■ 留意事項

小テストを含む試験時に不正な行為があったと認められた者については、規定に定める第16条を適用し、当期科目の全ての試験を無効にする。

■ 講義受講にあたって

授業科目	言語発達障害Ⅴ (援助法 - 各論)				
担当者	ネグロンちひろ・中山清司・岡崎満希子				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

言語コミュニケーション発達支援のための介入技法について学ぶ。工藤（第1回～第5回）は発達の遅れやアンバランスのある子どもや読み書きに難しさのある子どもの発達特性や障害メカニズム、スクリーニングや総合的なアセスメント、個別指導・支援・介入について講義する。門（第6回～第11回）は障害を持っている方々を支援するために必要な応用行動分析の知識の説明と現在使われているコミュニケーション支援の紹介をする。中山（第12回～第15回）は TEACCH を背景として、ASD 児者のライフステージやコミュニケーション支援、地域生活支援などを講義する。

■ 到達目標

発達の観点からみた障害の知識、アセスメント、介入技法を理解する。

■ 授業計画

- 第1回 発達支援の基本（岡崎）
- 第2回 言語発達支援1（岡崎）
- 第3回 言語発達支援2（岡崎）
- 第4回 発達特性に応じた支援1（岡崎）
- 第5回 発達特性に応じた支援2（岡崎）
- 第6回 応用行動分析の概念の復習（ネグロン）
- 第7回 応用行動分析の概念を使いながら教える方法（ネグロン）
- 第8回 応用行動分析の概念を使いながら教える方法（ネグロン）
- 第9回 応用行動分析の概念を使いながら教える方法（ネグロン）
- 第10回 PECS とは（ネグロン）
- 第11回 PECS とは（ネグロン）
- 第12回 自閉症・発達障害の特性理解に基づく支援の基本（中山）
- 第13回 自閉症・発達障害の人への地域生活支援に関する事例検討（中山）
- 第14回 自閉症のコミュニケーションプログラムの開発（中山）
- 第15回 自閉症のコミュニケーションプログラムに関する事例検討（中山）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

- ・言語発達障害学のテキストにある、障害別の指導法、応用行動分析、TEACCH の項目は一読しておくこと。
- ・指定教科書「自閉症支援のスタンダード Ver.2 ～余暇支援の展開～」、「教育へのピラミッドアプローチ 役に立つABA入門」を読んでおくこと（臨床実習等、実践のために大変役立つ書籍です）。
- ・1年次の言語発達障害Ⅱの資料も復習に役立つ。

■ 教科書

書名：標準言語聴覚障害学 言語発達障害学 第2版

著者名：玉井ふみ・深浦順一 編

出版社：医学書院

書名：自閉症支援のスタンダード Ver.2 ～余暇支援の展開～

著者名：中山清司ほか

出版社：自閉症 e サービス

書名：教育へのピラミッドアプローチ 役に立つ ABA 入門

著者名：アンディ・ボンディ著 門 眞一郎監訳 ネグロンちひろ編

出版社：ピラミッド教育コンサルタントオブジャパン

■ 参考図書

書名：絵カード交換式コミュニケーション・システム トレーニング・マニュアル 第2版

著者名：ロリ・フロスト(著), アンディ・ボンディ(著)

出版社：ピラミッド教育コンサルタントオブジャパン

書名：認知発達治療の実践マニュアルー自閉症の Stage 別発達課題 (自閉症治療の到達点2)

著者名：太田昌孝、永井洋子

出版社：日本文化科学社

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	言語発達障害Ⅵ (援助法一応用)				
担当者	松下真一郎・他				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・ AAC の実際について学ぶ。
- ・ 脳性麻痺児の言語障害の特徴やコミュニケーションの問題点を学習する。また、ボバース概念による言語治療の考え方を学び、評価の仕方を学ぶ。その上で摂食指導を行っていく上での基本の実技を学習する。
- ・ 乳幼児における視覚・聴覚・体性感覚の統合の重要性を踏まえ、身体運動の必要性を考察する。更にその問題構制を自閉症スペクトラムに敷衍して考察する。

■ 到達目標

1. AAC の適用について判断できる。
2. 脳性麻痺児の言語障害やコミュニケーションの問題、食事の問題点を知る。そして、それに対する援助方法を知り、理解する。
3. 脳性麻痺児の言語障害やコミュニケーションの問題、食事の問題点を知る。そして、それに対する、援助方法を知り、理解する。また、実際に指導を行っていく際の食べさせ方、飲ませ方、咀嚼を促す方法を習得する。
4. 新たな視点から言語発達障害を捉え直し、その理解を拡げる。

■ 授業計画

- 第1回 マカトンサイン, サウンズ&シンボルズ AAC 概論 (講師非公表)
- 第2回 マカトンサイン, サウンズ&シンボルズ 理論 (講師非公表)
- 第3回 マカトンサイン, サウンズ&シンボルズ 演習 (講師非公表)
- 第4回 マカトンサイン, サウンズ&シンボルズ 当事者に来ていただき演習 (講師非公表)
- 第5回 マカトンサイン, サウンズ&シンボルズ 当事者に来ていただき演習 (講師非公表)
- 第6回 日本版 PIC シンボルの概要、指導方法 (講師非公表)
- 第7回 シンボルを使ったコミュニケーション指導の事例 (講師非公表)
- 第8回 脳性麻痺児の言語障害概論 (口腔機能の正常発達も含めて) (講師非公表)
- 第9回 脳性麻痺児のコミュニケーションの問題と援助 (講師非公表)
- 第10回 ボバース概念による言語治療・評価 (講師非公表)
- 第11回 摂食指導について (実技演習) (講師非公表)
- 第12回 乳幼児における視覚・聴覚・体性感覚の統合の重要性 (松下)
- 第13回 乳幼児の視覚・聴覚・体性感覚の統合における身体運動の必要性 (松下)
- 第14回 自閉症スペクトラムにおける視覚・聴覚・体性感覚の統合 (松下)
- 第15回 自閉症スペクトラムにおける身体運動の必要性 (松下)

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

- ・ AAC に関する書籍に目を通しておくこと
- ・ 脳性麻痺児・者に対する関わりについて知識を整理しておくこと
- ・ コミュニケーション・言語に関する書籍に目を通しておくこと

■ 教科書

書名：言語聴覚療法シリーズ12 言語発達障害Ⅲ
著者名：笠井新一郎
出版社：建帛社

■ 参考図書

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	言語発達障害Ⅶ (援助法-臨床)				
担当者	齋藤 典昭				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

子どもさんに協力していただき、一緒に遊び、その後で「子どもさんの課題」と関わる「学生の課題」について検討します。

■ 到達目標

1. 子どもの多様性に気づくことができる
2. 子どもに合わせて上手に遊ぶことができる
3. 遊びを通じて子どもの能力を評価することができる

■ 授業計画

第1回	設定第1回	ガイダンスとセッションプログラムの確認	
第2回	設定第1回	子どもさんとのセッション	
第3回	設定第1回	セッションのフィードバックとディスカッション	
第4回	設定第2回	前回のふり返りとセッションプログラムの確認	
第5回	設定第2回	子どもさんとのセッション	
第6回	設定第2回	セッションのフィードバックとディスカッション	以上担当 A 班
第7回	設定第3回	前回のふり返りとセッションプログラムの確認	
第8回	設定第3回	子どもさんとのセッション	
第9回	設定第3回	セッションのフィードバックとディスカッション	
第10回	設定第4回	前回のふり返りとセッションプログラムの確認	
第11回	設定第4回	子どもさんとのセッション	
第12回	設定第4回	セッションのフィードバックとディスカッション	以上担当 B 班
第13回	設定第5回	前回のふり返りとセッションプログラムの確認	
第14回	設定第5回	子どもさんとのセッション	
第15回	設定第5回	セッションのフィードバックとディスカッション	
第16回	設定第6回	前回のふり返りとセッションプログラムの確認	
第17回	設定第6回	子どもさんとのセッション	
第18回	設定第6回	セッションのフィードバックとディスカッション	以上担当 C 班

■ 評価方法

準備を含めたセッションへの取り組み20%、提出レポート80% で評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業後、次回授業までに課題についてグループディスカッションを行い、レポートを作成・提出すること。

■ 教科書

書 名：言語聴覚障害診断 小児編
 著者名：大塚裕一，井崎基博
 出版社：医学と看護社

■ 参考図書

--

■ 留意事項

--

■ 講義受講にあたって

--

授業科目	音声障害				
担当者	宮田 恵里				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

1. 喉頭の解剖および呼吸と発声の仕組みを学ぶ
2. 音声障害の診断と評価方法を学ぶ
3. 音声治療の適応および実際のアプローチ方法を学ぶ
4. 音声外科と薬物療法について学ぶ
5. 気管カニューレや気管切開患者への対応および無喉頭音声について学ぶ

■ 到達目標

喉頭の解剖および呼吸と発声について理解する。
患者の病態から音声障害が生じている原因について理論的に説明を行い、適切な評価方法および治療法の選択、音声治療のアプローチ方法を考察出来るようになる。

■ 授業計画

- 第1回 声の特性・喉頭の解剖
- 第2回 発声と呼吸の仕組み
- 第3回 音声障害の評価と診断1
- 第4回 音声障害の評価と診断2
- 第5回 音声障害疾患の分類1
- 第6回 音声障害疾患の分類2
- 第7回 音声治療の実際
- 第8回 間接訓練
- 第9回 症状対処的音声治療1
- 第10回 症状対処的音声治療2
- 第11回 包括的音声治療1
- 第12回 包括的音声治療2
- 第13回 音声外科と薬物療法
- 第14回 無喉頭音声
- 第15回 病態から考える音声治療

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

毎講義後にテキストおよびレジュメ、配布資料を用いて復習を行うこと。

■ 教科書

書 名：言語聴覚療法シリーズ14 改定 音声障害
著者名：荻安誠 / 城本修 編集
出版社：建帛社

■ 参考図書

書名：STのための音声障害診療マニュアル

著者名：廣瀬肇 監修

出版社：インテルナ出版

書名：標準言語聴覚障害学 発声発語障害学 第2版

著者名：シリーズ監修：藤田郁代、編集：熊倉勇 / 今井智子

出版社：医学書院

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	構音障害 I (臨床の基礎)				
担当者	松本 治雄				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

話しことばの3要素である「構音」「音声」「パタン」のうち、コミュニケーション効率からみて最も中核をなすのは構音である。言語聴覚士の仕事の大半は構音指導であると言える。

講義は言語聴覚士が構音指導上基本として身につけるべき内容を演習的に修得することを目指している。

■ 到達目標

- ① コミュニケーション行動における話しことばの役割を知る。
- ② 構音の概念を理解し、正常構音の産生の機序を知る。
- ③ 構音障害の概念を理解し、障害像を知る。
- ④ 構音障害の種類について理解し、その検査、分析に基づく治療方法を知る

■ 授業計画

- 第1回 障害児音声の聴き取りとコミュニケーションの関わる要因について
- 第2回 発声発語器官の構音産生に関わる機序について
- 第3回 日本語音声の成り立ち 母音①
- 第4回 日本語音声の成り立ち 母音②
- 第5回 日本語音声の成り立ち 子音①
- 第6回 日本語音声の成り立ち 子音②
- 第7回 言語障害に関わる要因①
- 第8回 言語障害に関わる要因②
- 第9回 構音指導の検査と評価①
- 第10回 構音指導の検査と評価②
- 第11回 構音指導の方法①
- 第12回 構音指導の方法②
- 第13回 事例による演習①
- 第14回 事例による演習②
- 第15回 事例による演習③ と まとめ

■ 評価方法

筆記試験 (90%) とレポート (10%) を加味する。

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

- ① 日本語音声のすべての構音操作の理解と自身で構音を完璧に仕分ける。
また、言語聴覚士として構音操作を指導していくためには、複雑な構音操作を患者の年齢や理解度に合わせてステップ化して、訓練目標を理解させ、最終的には完璧に構音操作ができるよう、その修得過程を工夫する事が必要である。
- ② 発音記号の熟達 (様々な音声を適確に聴取し、同時に記述できるよう無意識的に操作できる身体動作として身につける)
- ③ 原則、毎回小テストを実施していくので、自己の熟達度を測り100%を達成する。

■ 教科書

書名：改訂 機能性構音障害
著者名：本間慎司編著
出版社：建帛社

■ 参考図書

書名：構音障害の臨床 改訂第2版
著者名：阿部雅子
出版社：金原出版

書名：音声表記・音素表記 記号の使い方ハンドブック
著者名：今井亜子
出版社：協同医書出版社

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業は単なる講義としてではなく、演習か実習として、能動的に受講する内容となる。自転車や自動車の運転のように、最初はもたついていても、しっかり心身が操作を身につけてしまえば、自然と様々な状態に対応できるようになる。このような言語聴覚士として成長することを目指して欲しい。

授業科目	構音障害Ⅱ（機能性）				
担当者	吉田紀子・松本治雄				（オムニバス）
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

機能性構音障害の指導に必要な基礎知識を学ぶ。
 構音の評価および結果の分析、指導のすすめかたについて演習を中心に学ぶ。

■ 到達目標

- ・ 構音発達の過程と機能性構音障害について理解する。
- ・ 構音を正確に聴き取り記録することができる。
- ・ 構音障害の検査、結果の分析、構音指導を立案・実施することができる。

■ 授業計画

- 第1回 機能性構音障害とは（吉田）
- 第2回 幼児期の構音発達（吉田）
- 第3回 構音の聴き取りと記録（吉田）
- 第4回 機能性構音障害における構音の誤り①（吉田）
- 第5回 機能性構音障害における構音の誤り②（異常構音）（吉田）
- 第6回 構音検査（実習）（吉田）
- 第7回 構音検査（結果の分析）（吉田）
- 第8回 指導プログラムの立案（吉田）
- 第9回 構音別の指導方法（吉田）
- 第10回 ケーススタディー①（吉田）
- 第11回 ケーススタディー②（吉田）
- 第12回 事例紹介（松本）（吉田）
- 第13回 事例紹介（松本）（吉田）
- 第14回 事例紹介（松本）（吉田）
- 第15回 事例紹介（松本）（吉田）

■ 評価方法

筆記試験100%、なお出欠および授業態度を考慮する

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

■ 教科書

書 名：言語聴覚療法シリーズ 改訂機能性構音障害
 著者名：本間慎治
 出版社：建帛社

■ 参考図書

■ 留意事項

--

■ 講義受講にあたって

--

授業科目	構音障害Ⅲ（器質性）				
担当者	藤原 百合				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

器質性構音障害（口蓋裂）について、基礎的知識、口蓋裂に伴う様々な問題点や、チームアプローチについて学ぶ。また、鼻咽腔閉鎖機能検査や構音検査の実施、治療計画の立て方や構音訓練について学ぶ。

■ 到達目標

口蓋裂に伴う構音障害の評価・診断、指導・訓練に関する知識・技能・態度を身につける

■ 授業計画

- 第1回 正常な発話のプロセス：呼吸、発声、共鳴、構音
- 第2回 器質性構音障害の定義、原因疾患、発症メカニズム、関連障害
- 第3回 口蓋裂言語の特徴（発声、共鳴、構音）
- 第4回 評価：発話の聴覚的印象
- 第5回 評価：口腔顔面の形態・機能
- 第6回 評価：口蓋裂言語検査（ビデオ）
- 第7回 機器を用いた評価：鼻咽腔閉鎖機能、構音機能
- 第8回 器質的異常に対する医学的治療：外科的、歯科補綴の治療
- 第9回 言語治療：機能訓練
- 第10回 言語治療：系統的構音訓練、視覚的フィードバック訓練
- 第11回 口蓋裂に伴う問題：哺乳・離乳、発達、聴力、心理社会的問題
- 第12回 チーム医療、年齢による対応の変化
- 第13回 症例検討（グループ演習）
- 第14回 症例検討（グループ演習）
- 第15回 まとめ、国家試験過去問

■ 評価方法

筆記試験（90％） 演習（10％）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業前に教科書の該当箇所を読んでくること。

■ 教 科 書

書 名：標準言語聴覚診断学 発声発語障害学
 著者名：藤田郁代 監修 熊倉勇美、今井智子 編集
 出版社：医学書院

■ 参考図書

書 名：DVD 「目で見る日本語音の産生」「目で見る構音障害」
 著者名：藤原百合、山本一郎
 出版社：EPG 研究会

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

疑問点はその場で質問してください。応答を全員で共有したいと思います。

授業科目	構音障害Ⅳ（運動障害性）				
担当者	熊倉 勇美				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

ST の果たすべき役割を具体的に学びます。評価法、訓練法などを習得しましょう。

■ 到達目標

症状とその背景を理解し、分析と訓練プランの立案、実施が出来るようにしましょう。

■ 授業計画

- 第1回 構音障害と ST 臨床の流れ
- 第2回 運動障害性構音障害（dysarthria）とは何か？
- 第3回 症例紹介：dysarthria、発語失行、失語症
- 第4回 症例紹介：原因疾患と臨床分類①
- 第5回 症例紹介：原因疾患と臨床分類②
- 第6回 ST の果たす役割：観察、検査と評価
- 第7回 包括的検査と要素的検査：その考え方と方法
- 第8回 リハビリテーション：その考え方と方法①
- 第9回 リハビリテーション：その考え方と方法②
- 第10回 拡大・代替コミュニケーション（AAC）、まとめ
- 第11回 器質性構音障害とは何か？
- 第12回 口腔・中咽頭がんの原因と治療
- 第13回 症例紹介：評価と訓練①
- 第14回 症例紹介：評価と訓練②
- 第15回 補綴治療、まとめ

■ 評価方法

筆記試験（100%）

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

授業は症例紹介などを通じて、具体的に、また演習で体験的にも行います。確認したいことや疑問点があれば、いつでも積極的に発言して下さい。

■ 教科書

書 名：改訂・運動障害性構音障害

著者名：熊倉勇美 編著

出版社：建帛社

書 名：口腔・中咽頭がんのリハビリテーション：構音障害、摂食・嚥下障害

著者名：溝尻源太郎・熊倉勇美 編著

出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

■ 留意事項

無断欠席や遅刻に注意して下さい。

講義受講にあたって：ST の役割を具体的、实际的に理解して下さい。

■ 講義受講にあたって

授業科目	嚥下障害 I (基礎と評価)				
担当者	中村 靖子				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・嚥下障害とは何かを学ぶ。
- ・正常嚥下の解剖やメカニズム、嚥下障害の検査・評価等、基本的な事項について学ぶ。

■ 到達目標

- ・嚥下障害とは QOL 全てに関わる障害であるということを理解することが出来る。
- ・嚥下に関わる解剖、生理、神経機構、病態を理解することが出来る。
- ・嚥下障害の評価法を理解し、簡易検査は実施できるようになる。

■ 授業計画

- 第1回 嚥下障害とは何か
- 第2回 解剖 (口腔)
- 第3回 解剖 (咽頭)
- 第4回 解剖 (喉頭、食道)
- 第5回 生理と神経機構 (口腔と咽頭)
- 第6回 生理と神経機構 (喉頭と呼吸)
- 第7回 嚥下モデル
- 第8回 病態 (中枢性、末梢性)
- 第9回 病態 (神経筋疾患、器質性)
- 第10回 評価とは何か
- 第11回 発声発語器官の評価
- 第12回 嚥下簡易評価 (RRST、MWST、FT)
- 第13回 その他の評価 (超音波検査、咳反射テストなど)
- 第14回 リスク管理
- 第15回 まとめ及び実技試験の説明

■ 評価方法

筆記試験 (100点満点) と実技試験 (100点満点)。どちらも60点以上で合格。両試験に合格すること。

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

講義内で小テストを行いますので復習をしておいてください。また、演習が多い講義です。スムーズに評価ができるようになるまで練習をしてください。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学
 著者名：倉智雅子
 出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書名：摂食嚥下リハビリテーション 第3版

著者名：才藤栄一 植田耕一郎

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

嚥下障害を学ぶ上で基礎となる科目です。しっかりと基礎知識を身に付けてください。

授業科目	嚥下障害Ⅱ（訓練と画像診断）				
担当者	田上恵美子・戸倉晶子				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・ 摂食・嚥下障害の基本的な訓練法について学び、訓練計画を考える。(田上)
- ・ 嚥下造影検査(VF)・嚥下内視鏡検査(VE)の目的、手順、解析方法について学習し、実際の画像を用いて症例検討を行う。(戸倉)

■ 到達目標

- ・ 臨床上必要な知識を身につけ、手技を実践できるようになる。(田上)
- ・ VF・VEの評価方法を習得し、嚥下障害の症状を理解できるようになる。(戸倉)

■ 授業計画

- 第1回 嚥下関連筋の解剖、呼吸・構音器官評価の復習(田上)
- 第2回 評価内容の解釈、訓練項目の組み立て、訓練法の実際Ⅰ(田上)
- 第3回 評価内容の解釈、訓練項目の組み立て、訓練法の実際Ⅱ(田上)
- 第4回 間接訓練(呼吸・咳嗽など)演習(田上)
- 第5回 間接訓練(頸部・顎・シャキア・メンデルソンなど)演習(田上)
- 第6回 間接訓練(舌・口唇・軟口蓋・ガムラビングなど)演習(田上)
- 第7回 直接訓練(頸部聴診・意識嚥下・横向き嚥下・ひと口量・丸のみ・顎引き・頭頸部など)(田上)
- 第8回 直接訓練(複数回嚥下・交互嚥下・一側嚥下・姿勢など)演習(田上)
- 第9回 姿勢調整・介助法(田上)
- 第10回 経口移行の目安、段階的摂食訓練(田上)
- 第11回 嚥下造影検査の目的・手順について(戸倉)
- 第12回 嚥下造影検査による評価、解析方法(戸倉)
- 第13回 症例検討(戸倉)
- 第14回 嚥下内視鏡検査による評価(戸倉)
- 第15回 嚥下造影検査と嚥下内視鏡検査の比較、まとめ(戸倉)

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習(予習・復習等)について

予習・復習を行うこと。また、空き時間を利用して実技の練習も積極的に行い、知識と技術の習得に努めること。

■ 教科書

書 名：言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学
 著者名：倉智雅子
 出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書名：脳卒中の摂食・嚥下障害 第2版

著者名：藤島一郎

出版社：医歯薬出版

書名：目で見る嚥下障害－嚥下内視鏡・嚥下造影の所見を中心として

著者名：藤島一郎

出版社：医歯薬出版

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	嚥下障害Ⅲ（事例と臨床）				
担当者	田上恵美子・糸田昌隆			(オムニバス)	
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

摂食・嚥下リハビリテーションの取り組みの実際について学ぶ
成人・高齢者における摂食・嚥下障害の病態診断とリハビリテーションの具体的対応法、周辺事項への対応法

■ 到達目標

個々のケースについて評価し、訓練プランを立案できるようになる
病態別嚥下障害に関する臨床現場における具体的対応法の立案が可能になる

■ 授業計画

- 第1回 変性疾患の嚥下障害学概論（田上）
- 第2回 ALS 事例による嚥下リハの進め方（田上）
- 第3回 ALS 事例に対する意思伝達演習（空書・読唇・50音表・透明板・読み上げ法）（田上）
- 第4回 パーキンソン病事例による嚥下リハの進め方（田上）
- 第5回 多系統萎縮症・筋ジストロフィー・重症筋無力症などの事例による嚥下リハの進め方（田上）
- 第6回 ST 訪問訓練について、その実際と課題（田上）
- 第7回 摂食嚥下障害のリスクマネジメントⅠ（非常勤講師）
- 第8回 摂食嚥下障害のリスクマネジメントⅡ（非常勤講師）
- 第9回 成人・高齢者の正常嚥下の理解Ⅰ（医療環境と制度を含む）（糸田）
- 第10回 成人・高齢者の正常嚥下の理解Ⅱ（糸田）
- 第11回 咀嚼・嚥下機能の神経・生理（糸田）
- 第12回 摂食・嚥下障害への具体的対応法（糸田）
- 第13回 摂食・嚥下障害への具体的対応法Ⅱ（糸田）
- 第14回 摂食・嚥下障害の栄養法を中心とした全身管理（糸田）
- 第15回 摂食・嚥下障害の栄養法を中心とした全身管理Ⅱサルコペニア・フレイル（糸田）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

復習を行い、質問等で疑問点の解決に努めること

■ 教科書

書 名：ケーススタディ摂食嚥下リハビリテーション in DVD ～50症例から学ぶ実践的アプローチ～
著者名：里宇明元，藤原俊之監修
出版社：医歯薬出版

■ 参考図書

書 名：事例でわかる摂食・嚥下リハビリテーション 現場力を高めるヒント
著者名：出江紳一，近藤健男，瀬田拓編集
出版社：中央法規

■ 留意事項

--

■ 講義受講にあたって

--

授業科目	嚥下障害Ⅳ (チームアプローチ)				
担当者	大塚佳代子・落合かおり・林直子・松岡俊哉・森田婦美子・余川ゆきの・中村靖子				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	1単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

摂食嚥下リハビリテーションに必要な知識と技術を演習を交えて学ぶ。
 気管切開患者の嚥下・発声発語障害の訓練法 (大塚)
 チームアプローチを行うにあたり多職種の業務内容を知り、連携内容について知る。(余川)

■ 到達目標

臨床上必要な知識を身に付け、手技を実践できるようになる。
 気管切開患者の嚥下障害と発声発語障害について理解し、訓練方法を学ぶ。(大塚)
 歯科衛生士が行う口腔リハビリテーションについて知識を得る。(余川)

■ 授業計画

- 第1回 カニューレの構造・役割・種類と取扱いについて (中村)
- 第2回 気管切開患者の嚥下障害と発声発語器官障害 (大塚)
- 第3回 気管切開患者の嚥下障害と発声発語訓練 (大塚)
- 第4回 内科的疾病と口腔ケア～動画を用いて～ (余川)
- 第5回 基本的な口腔ケアの注意点と手技 (機能的口腔ケア実習) (余川)
- 第6回 栄養管理について (落合)
- 第7回 NSTについて (落合)
- 第8回 嚥下食や治療食、食形態について (落合)
- 第9回 摂食嚥下障害のリハビリテーションについて病棟ナースがSTに期待すること① (林)
- 第10回 摂食嚥下障害のリハビリテーションについて病棟ナースがSTに期待すること② (林)
- 第11回 摂食嚥下訓練時のポジショニング (松岡)
- 第12回 吸引の手順の理解 (森田)
- 第13回 吸引の演習① (森田)
- 第14回 吸引の演習② (森田)
- 第15回 嚥下障害の総復習 (中村)

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

適宜授業中に指示する。

■ 教科書

書 名：発声発語障害学
 著者名：藤田郁代
 出版社：医学書院

書 名：言語聴覚士ドリルプラス摂食嚥下障害
 著者名：大塚裕一 福岡達之
 出版社：診断と治療社

■ 参考図書

--

■ 留意事項

--

■ 講義受講にあたって

--

授業科目	吃音				
担当者	土屋 美智子				
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

吃音の基礎知識や臨床に必要な基本的技能について学習する。

■ 到達目標

吃音児・者のおかれている現状を知り、言語聴覚士としての援助のあり方を理解する。
「吃音とは何か」を理解し、情報収集（検査含む）、評価および指導・訓練など臨床に必要な基本的知識・技能を身につける。

■ 授業計画

- 第1回 【吃音の基本的知識】
 第2回 【吃音症状】 吃音中核症状とその他の非流暢性などについて
 【進展段階】 吃音の進展段階について理解する
 第3回 【吃音児・者のおかれている現状】 吃音児・者のおかれている現状を知り、言語聴覚士としてどのように援助すべきかを考える
 第4回 【吃音臨床①】 吃音臨床の流れ 情報収集
 第5回 【吃音臨床②】 吃音検査法
 第6回 【吃音臨床③】 吃音の総合評価について（症例検討）
 第7回 【吃音臨床④】 吃音の指導・訓練法①
 第8回 【吃音臨床⑤】 吃音の指導・訓練法② 再評価（症例検討）

■ 評価方法

筆記試験 100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

■ 教科書

2019年度半ばに出版予定。後日指定します。

■ 参考図書

- 書 名：発声発語障害学第2版
 著者名：藤田郁代 シリーズ監修
 出版社：医学書院

 書 名：クラタリングー早口言語症ー
 著者名：Yvonne van Zaalen ら著 森浩一ら監訳
 出版社：学苑社

 書 名：改訂 吃音
 著者名：都筑澄夫 編著
 出版社：建帛社

■ 留意事項

--

■ 講義受講にあたって

--

授業科目	聴覚障害 I (概論)				
担当者	矢吹裕栄・山口忍			(オムニバス)	
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

聴覚障害学を学ぶに当たって必要となる基礎力を養う。その為に、聴覚の器官の解剖と機能を理解し、難聴と聴覚検査との関係を理解する。国家試験合格に必要な基礎理解を目指す。

■ 到達目標

聴こえの仕組みの基礎知識を習得する。

難聴のタイプ分類と聴覚検査法の基礎を習得し、検査結果から難聴のタイプを推定できるようになる。

■ 授業計画

- 第1回 基礎用語の確認
音とは何か、「きこえる」と言うこと。(矢吹)
- 第2回 聴覚器の解剖
外耳・中耳の解剖と機能 (矢吹)
- 第3回 聴覚器の解剖
内耳の解剖・機能 (矢吹)
- 第4回 前半のまとめと復習 (矢吹)
- 第5回 聴覚障害とは何か (矢吹)
- 第6回 難聴のタイプ分類 (矢吹)
- 第7回 聴覚検査法 1 (矢吹)
- 第8回 聴覚検査法 2 (矢吹)
- 第9回 聴覚障害の実態 (山口)
- 第10回 聴覚障害を来す疾患 (山口)
- 第11回 聴覚障害への対応 (山口)
- 第12回 補聴器の仕組みと適応 (山口)
- 第13回 人工内耳の仕組みと適応 (山口)
- 第14回 聴力検査の復習と結果のみかた (山口)
- 第15回 まとめ (山口)

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

学習内容が多くなるため、日々の復習が欠かせません。基本的事項の理解の積み重ねが重要な分野であり、基礎が疎かになるとその先の理解が難しくなります。その日のうちにその日の学習内容を復習する事が望ましいです。(矢吹)

■ 教科書

書名：聴覚検査の実態（改訂4版）

著者名：日本聴覚医学会 編集

出版社：南山堂

書名：標準言語聴覚障害学 聴覚障害学 第2版

著者名：中村公枝 城間将江 鈴木恵子

出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

無断欠席や遅刻に注意してください。毎回の積み重ねが重要なので極力欠席を避けるのが望ましいです。

■ 講義受講にあたって

中学高校の理科で習った音の性質を復習しておくとう理解が進みやすくなります。

授業科目	聴覚障害Ⅱ（聴覚検査法）				
担当者	福田章一郎・矢吹裕栄・田村薫・野田祥子・山口忍				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	2 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ・難聴発見から介入、Digital 補聴器および人工内耳などの補聴効果の判定に必要な聴力検査法を具体的に解説する（福田）
- ・前期の学習内容を整理し、基礎知識の関連を確認する。また、人工内耳の原理とマスキングに関する基礎を学習する。聴覚検査におけるマスキングを理解する為にオーディオグラムを読み検討する練習を行う。（矢吹）

■ 到達目標

- ・聴覚障害が言語、心理および社会性の発達にどのような影響を与えるかを具体的に映像などを通じて紹介し、聴覚障害児の発達および社会生活上の困難さの理解を促す（福田）
- ・聴覚器・疾患・検査結果の関連を整理する。人工内耳の仕組みを理解する。また、マスキングの考え方を基本的な数的処理とグラフを利用して習得する。（矢吹）

■ 授業計画

- 第1回 乳幼児の難聴の基礎と聴覚に関する全般について解説する（福田）
- 第2回 聴覚障害児の早期発見と新生児聴覚スクリーニングの目的と意義について解説する（福田）
- 第3回 難聴の原因やリスクファクターと遺伝および症候性難聴の特徴について解説する（福田）
- 第4回 乳幼児の聴覚検査の種類とその特徴ならびにそれぞれの方法および留意点について解説する（福田）
- 第5回 乳幼児の補聴の必要性とその方法および評価法ならびに補聴手段の種類と特徴や補聴補助システムについて解説する（福田）
- 第6回 聴覚障害児への初期介入および療育法の種類と内容について聴力程度、発達などを考慮しながら解説する（福田）
- 第7回 聴覚障害の原因疾患のまとめ（矢吹）
- 第8回 聴覚器・疾患・検査結果の関連を整理する（グループワーク）（矢吹）
- 第9回 人工内耳の仕組み1（矢吹）
- 第10回 人工内耳の仕組み2（矢吹）
- 第11回 マスキングとは（矢吹）
- 第12回 マスキングの考え方（演習）（矢吹）
- 第13回 マスキングの考え方2（演習）（矢吹）
- 第14回 標準純音聴力検査について（野田 or 田村）
- 第15回 標準純音聴力検査の検査演習（野田 or 田村）
- 第16回 Bekecy 検査について（野田 or 田村）
- 第17回 Bekecy 検査について（野田 or 田村）
- 第18回 閾値上検査について（野田 or 田村）
- 第19回 閾値上検査の検査演習（野田 or 田村）
- 第20回 聴性脳幹反応聴力検査について（野田 or 田村）
- 第21回 聴性脳幹反応聴力検査の検査演習（野田 or 田村）
- 第22回 インピーダンスオーディオメーターについて（野田 or 田村）
- 第23回 語音聴力検査について（野田 or 田村）
- 第24回 聴覚検査結果の解説 検査目的と意義（山口）

- 第25回 聴覚検査結果の解説 検査目的と意義 (山口)
- 第26回 幼小児の聴力検査 (山口)
- 第27回 幼小児の聴力検査 (山口)
- 第28回 臨床の実際 発達遅滞例の聴力評価 (山口)
- 第29回 臨床の実際 補聴器機フィッティングの考え方 (山口)
- 第30回 まとめ (山口)

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習 (予習・復習等) について

- ・前期の聴覚障害 I の内容を踏まえて授業が進みます。聴覚障害 I で理解に不安のある場合は復習をしておく必要があります。(矢吹)
- ・各種聴覚検査の目的・適応・方法について理解する事。互いに測定し合い、純音聴力検査およびティンパノメトリーのプローブ装着が出来るようになること。幼小児の聴覚検査の種類と適応年齢について憶えること。補聴器フィッティングについて説明できるようになること (野田・田村・山口)

■ 教科書

書名：聴覚検査の実際 (改訂4版)
著者名：日本聴覚医学会
出版社：南山堂

■ 参考図書

■ 留意事項

無断欠席や遅刻に注意してください。毎回の積み重ねが重要なので極力欠席を避けるのが望ましいです。

■ 講義受講にあたって

聴覚器の解剖・機能、聴覚障害の分類、難聴タイプ毎の特徴、聴覚検査の基本的事項を復習しておくことで理解が進みやすくなります。

授業科目	聴覚障害Ⅲ (各論)				
担当者	田中美郷・大森千代美・中井弘征・本庄良一・山口忍				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	2 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

聴覚障害児対策の歴史的経緯最近の動向、およびSTに期待される役割。聴覚障害児の診方と対策。聴覚障害児の言語指導とその目標。人間の聴覚機能・聴覚活用の方法：補聴器・人工内耳。私の50年にわたる実践研究とその成果（田中）聴覚障害教育における指導・支援の実際について学ぶ（中井）難聴乳幼児の発見とことばを育てる関わり方について学ぶ（大森）補聴器適合の基本的スキルと、乳幼児・学童児・青年期の各年代ごとの補聴器支援・装用指導について実務上の留意事項を学ぶ（本庄）

■ 到達目標

1. 人間と動物の違いを決定づけるものは何か 2. 聴覚障害児教育は人間化教育、そのためにはどのような方策があるか 3. 言語とは何か、聴覚言語と視覚言語 4. 日本語をいかに育てるか そのための支援方策 5. これらの問題にグローバルな視点でいかに取り組むべきか（田中）個々の実態に合わせたコミュニケーション方法や指導・支援について理解できる（中井）難聴乳幼児のことばを育てるための関わりの技法や実際の療育の様子を知る（大森）1. 補聴器適合に関する具体的操作が説明できる 2. 各年代ごとの留意事項を説明できる 3. 補聴器援助機器の役割と適合について説明できる 4. 装用に関わる理解啓発指導について説明できる（本庄）

■ 授業計画

- 第1回 聴覚障害児対策の歴史的経緯と最近の動向 早期発見・早期対策（田中）
- 第2回 聴覚障害児の診方と対策（田中）
- 第3回 人間の聴覚機能：脳の視点から（田中）
- 第4回 聴覚障害児の言語指導とその目標・方法（田中）
- 第5回 日本語教育における聴覚活用（補聴器・人工内耳）と手話の活用（田中）
- 第6回 私の実践とその成果からみた提言（田中）
- 第7回 難聴児の発見（大森）
- 第8回 難聴児のことばを育てる関わり（大森）
- 第9回 難聴児療育の実際Ⅰ（大森）
- 第10回 難聴児療育の実際Ⅱ（大森）
- 第11回 聴覚障害教育を理解するための歴史的経過（中井）
- 第12回 聴覚障害教育の実際Ⅰ（聴力の把握、聴覚学習）（中井）
- 第13回 聴覚障害教育の実際Ⅱ（言語指導・自立活動、進路）（中井）
- 第14回 教育機関での補聴器装用指導：ライフステージに合わせた指導と支援①（本庄）
- 第15回 教育機関での補聴器装用指導：ライフステージに合わせた指導と支援②（本庄）
- 第16回 教育機関での補聴器装用指導：ライフステージに合わせた指導と支援③（本庄）
- 第17回 教育機関での補聴器装用指導：ライフステージに合わせた指導と支援④（本庄）
- 第18回 聴覚障害の心理的援助（1）（山口）
- 第19回 聴覚障害の心理的援助（2）（山口）
- 第20回 聴覚障害の検査と評価（1）（山口）
- 第21回 聴覚障害の検査と評価（2）（山口）
- 第22回 聴覚障害児ケースワークⅠ（山口）
- 第23回 聴覚障害児ケースワーク（2）（山口）
- 第24回 聴覚障害児ケースワーク（3）（山口）

- 第25回 聴覚障害を来す疾患の復習1 (山口)
- 第26回 聴覚障害を来す疾患の復習2 (山口)
- 第27回 聴覚障害の遺伝子診断 (山口)
- 第28回 聴覚検査の復習1 (山口)
- 第29回 聴覚検査の復習2 (山口)
- 第30回 まとめ (山口)

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

教科書指定されている「聴覚障害の実際」のⅠ基礎編を、第1回～第6回の集中講義前に、Ⅱ実践編を第7回～第10回の集中講義前に読了しておくこと。

■ 教科書

書名：標準言語聴覚諸障害 聴覚障害学
著者名：中村公枝 城間将江 鈴木恵子
出版社：医学書院

■ 参考図書

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	補聴器・人工内耳				
担当者	竹田利一・北野庸子・相宗菜摘・山口忍				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

補聴器のフィッティングにおける総合的な知識、補聴器適応の決定、補聴器の調整選択、補聴器適合検査の指針（竹田）人工内耳等の仕組みや適応、マッピング、聴覚障害児者の臨床の実際について学ぶ（相宗・北野・山口）

■ 到達目標

補聴器のフィッティングにおける総合的な知識、補聴器適応の決定、調整と選択の基礎、補聴器適合検査結果の評価について説明できる（竹田）人工内耳の原理を知り、適応や装着・リハビリテーションの内容や進め方を説明できる。人工内耳装用者など聴覚障害児者に適切な関わり方ができ、必要なリハビリテーション・リハビリテーションを提案することができる（相宗・北野・山口）

■ 授業計画

- 第1回 補聴器の種類と仕組み（竹田）
- 第2回 補聴器の性能（補聴器の最新デジタル機能）（竹田）
- 第3回 補聴器に関する測定、JIS、カプラの違い、実耳測定、補聴器特性検査装置を使った実習（竹田）
- 第4回 補聴器調整器の使い方、調整器の意味（竹田）
- 第5回 補聴器調整器の使い方、調整器の意味（竹田）
- 第6回 補聴器フィッティングの考え方（リニア・ノンリニア増幅）（竹田）
- 第7回 補聴器フィッティングの考え方（リニア・ノンリニア増幅）（竹田）
- 第8回 補聴器装用効果の評価と補聴器適合検査の指針2010の解説（竹田）
- 第9回 難聴幼児の母親指導（北野）
- 第10回 難聴を有する大学生の支援（北野）
- 第11回 人工内耳の原理 仕組みや適応基準（相宗）
- 第12回 音響処理方式とマッピング、人工内耳リハビリテーション（小児）（相宗）
- 第13回 補聴器・人工内耳・聴覚障害総復習（山口）
- 第14回 補聴器・人工内耳・聴覚障害総復習（山口）
- 第15回 補聴器・人工内耳・聴覚障害総復習（山口）

■ 評価方法

筆記試験100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

第1回～第8回は、1年時、2年前期に学習した補聴器の仕組み、特性測定の復習をして講義に臨むこと。第13回～15回はこれまで聴覚障害ⅠⅡⅢ、耳鼻咽喉科学、補聴器・人工内耳の第1回～12回の講義までの内容を総復習するので、過去のノートや教科書をよく読んでおくこと。講義中に質問紙、口頭で解答を求めます。

■ 教科書

書 名：補聴器フィッティングと適応の考え方
 著者名：小寺一興
 出版社：診断と治療社

■ 参考図書

--

■ 留意事項

--

■ 講義受講にあたって

--

授業科目	視覚聴覚二重障害				
担当者	佐藤八郎・大西環・塩見千夏				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

- ①視覚聴覚二重障害について概説する（塩見）
- ②拡大・代替コミュニケーション（AAC）の概要と体験（佐藤）
- ③視覚障害者の福祉施設の見学と講義（大西）

■ 到達目標

- ①視覚聴覚二重障害の概要、特徴等を知り理解を深める（塩見）
- ②シンプルテクノロジー活用の意義とスイッチ制作体験。拡大・代替コミュニケーション支援に役立つパソコン活用とシンボル活用の理解（佐藤）
- ③視覚障害者を取り巻く現状を知り理解を深める（大西）

■ 授業計画

- 第1回 視覚障害、聴覚障害の概説とそれらによる視覚聴覚二重障害について（塩見）
- 第2回 視覚聴覚二重障害におけるコミュニケーションモード、事例の紹介、過去の国家試験の解説等（塩見）
- 第3回 拡大・代替コミュニケーションとは① AACの理念と発展（佐藤）
- 第4回 拡大・代替コミュニケーションとは② シンプルテクノロジーの活用とその意義（スイッチ製作実習）（佐藤）
- 第5回 身近なコミュニケーション・エイドとパソコンのアクセシビリティ（補助機能）（佐藤）
- 第6回 コミュニケーションシンボルの活用 情報機器とシンボルの活用（DropTalkの体験実習）（佐藤）
- 第7回 視覚障害者福祉の歴史と現状1（施設見学を含む）（大西）
- 第8回 視覚障害者福祉の歴史と現状2（施設見学を含む）（大西）

■ 評価方法

レポート100%

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

佐藤：iPad や iPhone または android スマートホン（またはタブレット）を持っている人は、事前に「DropTalk」の無料版をアプリストアからダウンロードして（5回・6回目）の講義に持参して下さい。

■ 教科書

■ 参考図書

■ 留意事項

■ 講義受講にあたって

授業科目	臨床実習 I				
担当者	大西環・大根茂夫・齋藤典昭・岡崎満希子・中村靖子・平林容子・塩見千夏				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	1 単位
		開講時期	前期	選択・必修	必修

■ 内 容

I 期臨床実習（見学実習） 設定期間：1 週間

■ 到達目標

言語聴覚士の業務の流れを理解し、関連職種との連携を理解する。

■ 授業計画

言語聴覚士としての役割を理解し、職務に対する倫理や基本的な姿勢など言語聴覚士としての適性を養う。実習協力施設・病院にて、ご指導を頂くスーパーバイザー（SV）の言語聴覚療法を見学させて頂く。毎日実習日誌を作成し、提出する。SV から与えられた課題のレポートなどを作成する。「実習のふり返し」を作成する。詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

- ① 実習ガイダンスの出席状況と取り組み
 - ② 実習の進捗状況・実習への取り組み具合
 - ③ SV からの種々の情報
 - ④ SV 記載の成績表・所見
 - ⑤ 実習日誌
 - ⑥ 出席状況
 - ⑦ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表準備の状況
 - ⑧ 実習報告会に向けての取り組み
- ①～⑧を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に実習ガイダンスを行う。内容について十分復習し、各自練習した上で実習に臨むこと。実習終了後は、実習で把握した自分の課題にとりくみ、次の実習に向けて準備すること。

■ 教 科 書

書 名：言語聴覚療法臨床マニュアル

著者名：小寺富子監修

出版社：協同医書出版社

書 名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 成人編

著者名：深浦順一、為数哲司、内山量史

出版社：建帛社

書 名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 小児編

著者名：深浦順一、内山千鶴子

出版社：建帛社

■ 参考図書

--

■ 留意事項

出席日数が規定の4/5に満たないものは、科目履修の認定はされない。

■ 講義受講にあたって

--

授業科目	臨床実習Ⅱ				
担当者	大西環・大根茂夫・齋藤典昭・岡崎満希子・中村靖子・平林容子・塩見千夏				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	1 年	総単位数	5 単位
		開講時期	後期	選択・必修	必修

■ 内 容

Ⅱ期臨床実習（評価実習） 設定期間：5 週間

■ 到達目標

臨床実習Ⅰ及び学内で学んだ検査手順や評価に関する知識を基に、指導を受けながら言語聴覚療法における検査及び評価が出来るようになる。また、指導援助プログラムの立案について考えることが出来る。

■ 授業計画

言語聴覚士としての役割を理解し、職務に対する倫理や基本的な姿勢など言語聴覚士としての適性を養う。実習協力施設、病院様にて、ご指導いただく SV の指示、監督のもと、患者（児）様に検査等を行い、その結果を分析して他の所見と併せて総合評価を行う。さらにその評価に基づき、指導援助プログラムを立案する。

実習日誌を毎日作成し、SV から与えられたレポート課題などをする。

「実習のふり返し」を作成する。

症例報告書を作成する。

詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

- ① 実習ガイダンスの出席状況と取組み
 - ② 実習の進捗状況・実習への取組み具合
 - ③ SV からの種々の情報
 - ④ SV 記載の成績表・所見
 - ⑤ 症例報告書
 - ⑥ 実習日誌
 - ⑦ 出席状況
 - ⑧ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表・質疑応答
 - ⑨ 実習報告会に向けての取組み
- ①～⑨を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に実習ガイダンスを行う。内容について十分復習し、各自練習した上で実習に臨むこと。実習終了後は、実習で把握した自分の課題にとりくみ、次の実習に向けて準備すること。

■ 教科書

書名：言語聴覚療法臨床マニュアル

著者名：小寺富子監修

出版社：協同医書出版社

書名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 成人編

著者名：深浦順一、為数哲司、内山量史

出版社：建帛社

書名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 小児編

著者名：深浦順一、内山千鶴子

出版社：建帛社

■ 参考図書

■ 留意事項

出席日数が規定の4/5に満たないものは、科目履修の認定はされない。

■ 講義受講にあたって

授業科目	臨床実習Ⅲ				
担当者	大西環・大根茂夫・齋藤典昭・岡崎満希子・中村靖子・平林容子・塩見千夏				(オムニバス)
実務経験者の概要					
学科名	言語聴覚専攻科	学 年	2年	総単位数	6単位
		開講時期	通年	選択・必修	必修

■ 内 容

Ⅲ期臨床実習（総合実習） 設定期間：8週間

■ 到達目標

言語聴覚士としての役割を理解し、職務に対する倫理や基本的な姿勢など言語聴覚士としての適性を養う。検査及び評価に基づき、指導援助プログラムの立案を行い、言語聴覚療法を指導を受けながら実施できる。

■ 授業計画

実習施設・病院で、臨床実習指導者（スーパーバイザー・SV）のご指導・監督のもと、患者（児）様の検査、評価、指導訓練プログラムの立案、訓練等実際の言語聴覚療法を経験する。

実習日誌を毎日作成し、SV から与えられたレポート課題などを作成する。

「実習のふり返し」を作成する。

症例報告書を作成する。

詳細については、後日配布の「臨床実習の手引き」を参照すること。

■ 評価方法

- ① 実習ガイダンスの出席状況と取組み
 - ② 実習の進捗状況・実習への取組み具合
 - ③ SV からの種々の情報
 - ④ SV 記載の成績表・所見
 - ⑤ 症例報告書
 - ⑥ 実習日誌
 - ⑦ 出席状況
 - ⑧ 実習報告会のレジメ・パワーポイント・発表・質疑応答
 - ⑨ 実習報告会に向けての取組み
- ①～⑨を総合し、専攻科主任が評価する。

■ 授業時間外の学習（予習・復習等）について

事前に実習ガイダンスを行う。内容について十分復習し、各自練習した上で実習に臨むこと。

I 期臨床実習、II 期臨床実習で明らかになった自己の課題を解決すべく、しっかり準備をして臨むこと。

■ 教科書

書 名：言語聴覚療法臨床マニュアル

著者名：小寺富子監修

出版社：協同医書出版社

書 名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 成人編

著者名：深浦順一、為数哲司、内山量史

出版社：建帛社

書 名：言語聴覚士のための臨床実習テキスト 小児編

著者名：深浦順一、内山千鶴子

出版社：建帛社

■ 参考図書

--

■ 留意事項

出席日数が規定の4/5に満たないものは、科目履修の認定はされない。

■ 講義受講にあたって

--